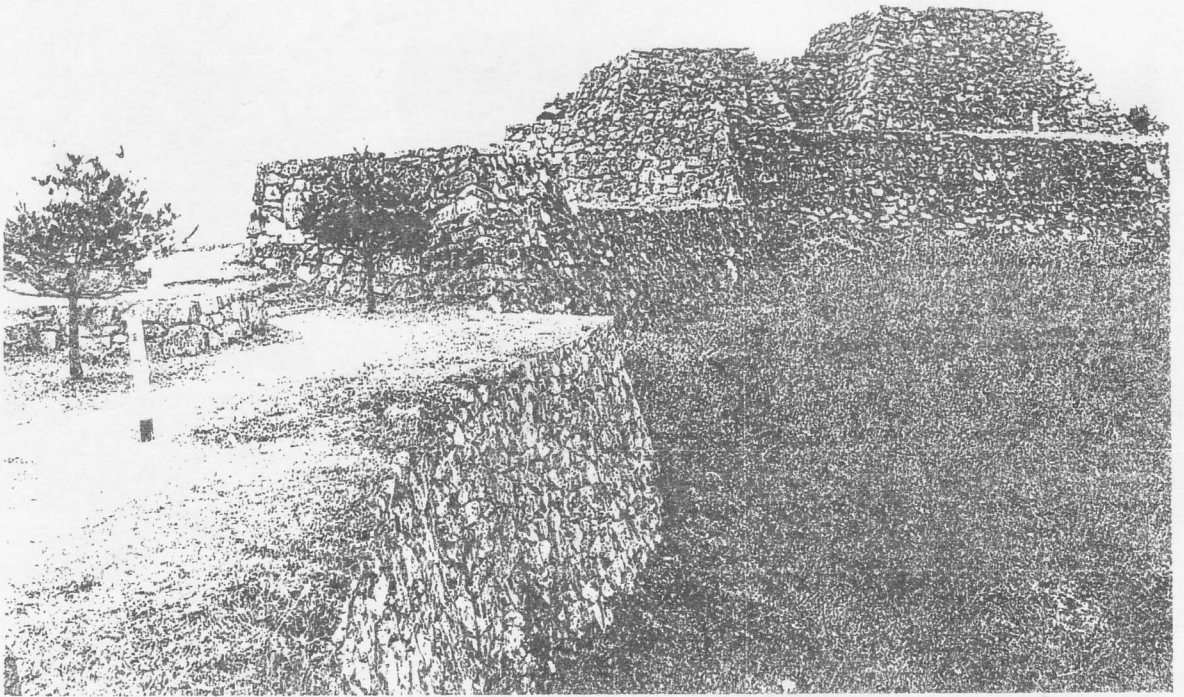


燃える秋 但馬・丹後を味わう旅

— 竹田城と古代丹後王国を訪ねる —

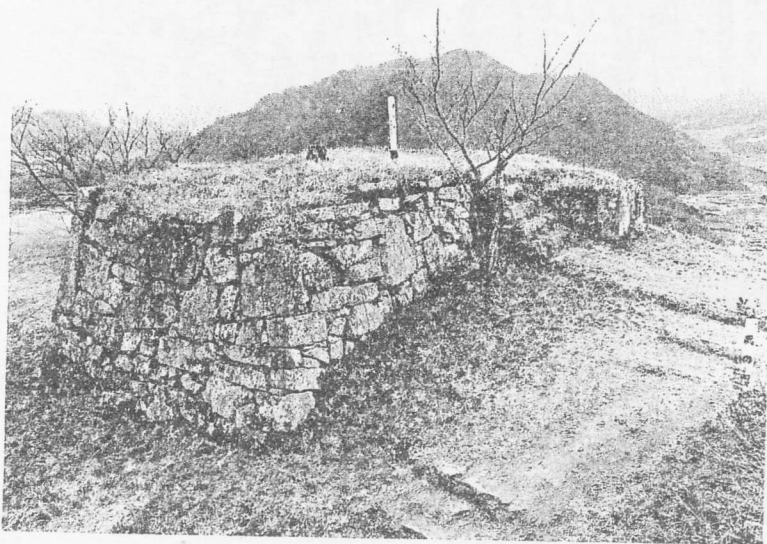


竹田城南二の丸から本丸を望む

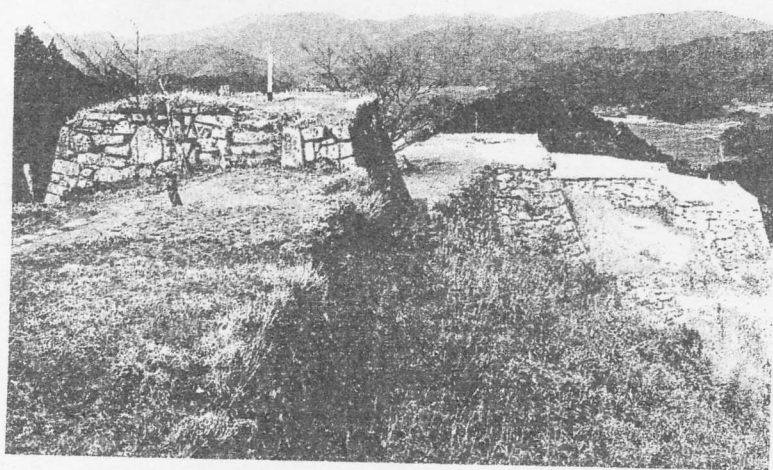
備陽史探訪の会

平成10年10月17日・18日

竹田城の総石垣部



武の門と櫓台
(東から)



曲輪の高低差
武の門、三の丸、北千畳
(西から)



北千畳の大手門
(南西から)

秋の一泊旅行スケジュール

《 初 日 》

6:45 福山駅北口集合完了
6:55 福山駅北口出発
7:10 福山東IC
8:30 竜野西SA着(トイレ休憩)
8:45 竜野西SA発
9:15 真弓峠通過
9:45 「ドライブイン朝来山着」(トイレ休憩)
10:00 「ドライブイン朝来山着」発
10:05 竹田駅着下車
10:10 竹田駅着発
11:00 竹田城本丸着、以後見学(～11:45)
11:45 昼食
12:20 竹田城本丸発
12:55 竹田駅着
13:00 竹田駅発
13:05 「ドライブイン朝来山着」(トイレ休憩)
13:15 「ドライブイン朝来山着」発
13:30 和田山町郷土館着(トイレ休憩)
14:00 和田山町郷土館発
14:25 大蔵古墳群着
15:00 大蔵古墳群発
15:30 出石城下町町並散策(トイレ休憩)
16:20 出石城下町町並散策終了
16:30 宗鏡寺着
17:00 宗鏡寺発
17:10 出石神社着(トイレ休憩)
17:30 出石神社発
18:15 かんぼの宿「但馬海岸豊岡」着
19:15 宴会開始

《 2 日 目 》

6:50 起床・荷物整理
7:30 朝食バイキング
8:15 かんぼの宿「但馬海岸豊岡」発
8:45 神谷神社・旧久美浜県庁舎着
9:10 神谷神社・旧久美浜県庁舎発
9:15 如意寺着(トイレ休憩)
9:45 如意寺発
10:50 京都府立丹後郷土館・丹後国分寺跡着
11:25 京都府立丹後郷土館・丹後国分寺跡発
11:30 昼食(ドライブイン・トイレ休憩)
12:15 簗神社着(トイレ休憩)
12:45 簗神社発
13:00 智恩寺着(トイレ休憩)
13:40 智恩寺発
14:05 加悦町古墳公園着(トイレ休憩)
14:50 加悦町古墳公園発
16:00 福知山IC着
16:20 西紀SA着(トイレ休憩)
16:35 西紀SA発
17:45 竜野西SA着(トイレ・夕食休憩)
18:15 竜野西SA発
19:10 道口PA着(トイレ休憩)
19:20 道口PA発
19:40 福山東IC着
20:00 福山駅北口着

※雨天の場合コースを変更します。

《参》但馬国略史

山陰道の一国。北は日本海に面し、東から丹後・丹波・播磨・因幡の各国と接している。但馬は古くから開け、現在の村岡町や豊岡市域に縄文・弥生時代の遺跡が、また各地に古墳が多く分布する。また、新羅王子天日槍(あめひぬさ)の渡来定住の説話が『記紀』や『播磨国風土記』に見えるので、古代には大陸や半島との関係も深かったと思われる。

延暦23年(804)但馬国府を気多郡高田郡に移したと『日本後記』に見える。『延喜式』は朝来・養父・出石・気多・城崎・美含・二方・七美の8郡を記している。また承和12年(845)に出石神・養父神・粟鹿神が初めて従五位下に叙任しており、このころから但馬の地域的主体性が形成されたと思われる。

保元・平治の乱後、平家が勢力を得、但馬は平経盛(つねもり)の知行国となったが、源平の合戦の後には後白河院の手に帰したようだ。この後、源頼朝は文治元年(1185)、横山時広を但馬の総追捕使(そうつうし)としたが、これが但馬守護の嚆矢(きょし)とされる。その後、安達親長が守護につくが、承久の乱で京方に加わったため、太田荘の御家人法橋(太田)昌章(ちやうきやう)が乱後に守護となった。これ以後、昌明の子孫の太田氏が守護をついた。

弘安8年(1285)守護太田政頼が『但馬国大田文』を注進しているが、これによると総田数は5100余町、うち国領の郷保1400余町、荘領3600余町である。その中では歓喜院領賀都荘などの皇室領が圧倒的に大きい。その次が伊勢皇大神宮領である。一方、下級領主職では守護太田一族の地頭職等の所領が最も大きく約1割近くある。その次が関東御領である。

元弘の乱では、守護太田守延が後醍醐天皇の官軍に加わったが戦死した。南北朝期には但馬国は足利直義(ただよし)の知行国になっていたようである。応安5年(1372)山名時義が守護となるが、但馬が山名氏の大名領国化されるのは明德の乱(明德2年、1391)で山名時熙(ときひろ)が守護となってからである。

但馬は中世を通して養蚕業や但馬牛の牧畜業や銀銅鉄などの鉱山業が発展し、中世末には城崎九日市場、宿駅広谷町、生野銀山、豊岡城下などの諸都市が栄えた。

永禄12年(1569)織田信長が木下(豊臣)秀吉に但馬出兵を命じたが、守護山名祐豊は亡命。天正8年(1580)の出兵では本拠出石城(有子山城)の山名氏がついに滅びた。秀吉の天下になると、但馬一国が羽柴秀長に与えられた。文禄元年(1592)の秀吉の朝鮮侵略では、出石城主前野長康・豊岡城主明石則実・八木城主別所重棟・竹田城主赤松政秀に出兵が命じられている。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで徳川家康が天下をとると、すぐに大名の配置換えが実施された。慶長8年(1603)の時点で、但馬では出石藩小出吉政6万石、豊岡藩杉原長房2万石、それに村岡藩山名氏と天領の生野代官所領がある。後に出石藩は松平氏から仙石氏と変わり、豊岡藩は京極諸氏で明治維新を迎えることになる。

近世における但馬の産物は、寛永のころの『毛吹草』や正徳のころの『和漢三才図絵』などに、真綿・苧(くわい)・柳行李(やなぎり)・温石(おんいし)・銀・牛・朝倉山椒・出石絹・諸磯(もろいそ)の砥石などが見える。人物では、出石に生を受けた臨済宗の僧侶沢庵宗彭(はくわんそうほう)和尚、『但馬考』の著者桜井良翰(舟山)、養蚕家で『養蚕秘録』の著者上垣伊兵衛らがあげられる。

政治面でも波乱はあり、天保期のお家騒動として有名な仙石騒動、文久の生野の変はもちろんのこと、民衆の一揆や打ちこわしの類も少なくない。古くは元和4年(1618)の生野の一揆から、幕末の朝来郡打ちこわし(元治元年)や村岡藩の一揆(慶応2年)まで十数件にもなった。

《参》真弓峠の戦い

文明15年(1483)12月25日、生野真弓峠で戦われた赤松政則と山名政豊の合戦。

備前福岡城を救援するため京都から播磨に下国した赤松政則は、但馬より山名政豊が進撃してくることを聞きおよび、福岡城救援には赤松政秀と浦上則景を赴かせ、自らは兵力を率いて生野に向かった。しかし、深雪の真弓峠で山名方の先鋒垣屋越前守の二千余騎の急襲を受けて大敗した。

この結果、永良・本郷・柏原・上原・布施・松田らの武将34人、総じて300余人を戦死させ、政則は播磨から敗走し、一時は敗死や出家の噂が流れた。山名軍はたちまち播磨を席卷し、福岡城も落城、山名氏は播磨・備前・美作3国を奪還した。

これに対し、浦上則景は在京の赤松家臣たちとともに、政則の廃嫡と一族赤松慶寿丸の擁立を将軍足利義尚に願ひ出て許され、兵を率いて播磨に下向し、再び山名氏と死闘を演じなければならなかった。

一方、落魄していた政則は前将軍義政にすがって家督に返り咲き、兵を集めて播磨に下り、やがて則宗と和睦、協力して山名軍を追い落とした。しかし、この合戦の後遺症は赤松・浦上両氏に深い溝となって残った。

竹田の町並 (兵庫県朝来郡和田山町竹田)

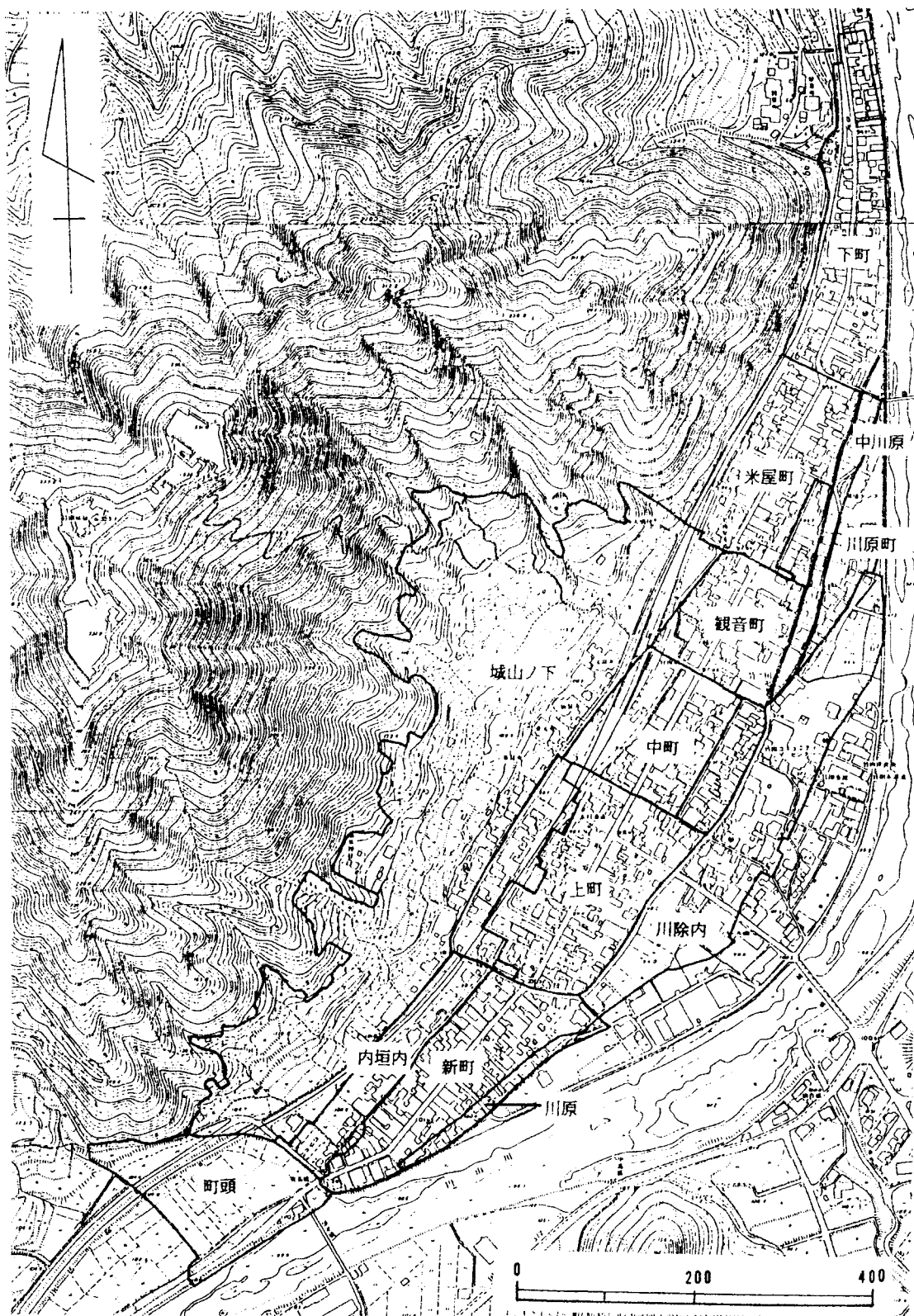
竹田は竹田城の東麓の集落で、円山川との間に通る但馬と播磨を結ぶ生野街道沿いに形成された1.5キロメートルにおよぶ宿場町である。

町は古城山の形に従って途中で折れ曲がる。現在の町屋はほとんどが明治に入って建てられたものであるが、外観は江戸時代とほとんど同じである。

平入り半二階の棧(はし)瓦葺き切妻の建物が主で、棟高はほとんどが同じ高さに並んでいる。敷地の間口は3間ないしは4間で、ほぼ敷地いっぱい壁を隣と接して建てている。正面の1階は半間の付庇(ひし)を室内に取り込んで、部屋の前は腰まで細格子を建てる。

但馬地方はフェーン現象などのために、火災の際には大火になることが多く、古い町並みが残りづらいが、この竹田は例外的によく保存されており貴重である。





竹田城下町地区の字限図 (1 / 7000)

竹田城(兵庫県朝来郡和田山町竹田字古城山)

別名、虎臥(にみ)城ともいう。標高358メートルの古城山の頂上に築かれた山城。

天守を中心に本丸・二の丸・三の丸・奥殿・講武所・南千畳・北千畳・花屋敷・正門・大手門・武の門のほか、各要所に櫓を持ち、規模、構造ともによく整備保存されている。

伝承によれば、竹田城は永享・嘉吉年間(1429～1444)に山名持豊(宗全)が築き、山名四天王の一人、太田垣氏に守らせたという。城主は太田垣氏5代(定説では光景―景近―宗朝―宗寿―朝廷)→羽柴秀長→桑山重晴→赤松広秀と続いた。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍に与(くみ)した赤松広秀は、その敗北を知るや保身のために鳥取城攻めに従軍した。ところが、鳥取城下を焼亡させたために家康の不興をかい、責めを負って同年、真教寺において自害。そのため竹田城は廃城となった。

現在残っている城郭の遺構は、石垣や縄張りの様式から判断して、主に文禄から慶長5年(1592～1600)にかけて再整備されたものと考えられている。再整備の施工者については、この時期の城主赤松政秀単独によるものとみる研究者は少なく、豊臣政権の全面的テコ入れによって築かれたと考えられている。竹田城は全国有数の織豊系城郭であり、当時においても第一級の築造プランを持っている。換言すると、豊臣政権の中枢にいる超一流の設計者が派遣されないと造ることのできない構造と規模をもっているのである。

また竹田城は、慶長5年(1600)に廃城になったことが明確である。したがって、この段階での城郭の基準モデルとなっている。すなわち、竹田城より構造的に進んだものか、遅れたものかを見ることによって、その城郭が織豊期のものなのか、それとも徳川期のものなのかを区別することが理論上可能となるのである。

織豊期に築かれた城郭は廃城になったもの以外、大部分は江戸期に入って大改修されている。例えば、大坂城や姫路城はもともとは秀吉が造った城郭だが、現在残っているのは実は江戸時代に造り直された城郭なのである。織豊期の最高技術で造られた城郭を考えると、竹田城はまさに日本を代表する城郭といっても過言ではない。

竹田城の遺構は石垣などが極めて良好な姿で残り、昭和18年(1943)に国史跡に指定された。文化庁・兵庫県教育委員会・和田山町教育委員会が昭和52年(1977)に策定した竹田城保存計画によると、原則として人工的なものを一切造らずに竹田城を保存していくことが決められている。例えば竹田城にはトイレがない。しかし、石垣以外何も置かないことは、実は大変な辛抱が必要である。観光のためにといって安易にコンクリートの休憩所を作らない、しかし、いつ来ても遺構がはっきり見られるように雑草はこまめに刈り取る ― こうした地道な努力は文化財関係者が積み上げてきた竹田城保存計画の柱となっている。

なお、竹田城の建造物の一部は城下の寺院や民家に転用されて残っている。

竹田城築城の背景

江戸後期に成立した史料に『和田上道氏日記(上道陳兵衛覚書)』がある。現在の和田山町中村の庄屋を務めた上道(かべ)氏の祖は、竹田城主であった太田垣氏代々の被官(家臣)であったとの伝承がある。この日記によれば、嘉吉年間(1441～1443)のこととして、丹波・播磨への出入口である竹田の地に、太田垣土佐守の「安井ノ城」が築かれたことを記している。この安井ノ城の「安井」とは地名の小字で「竹田城」そのものを指す。おそらくこの日記が書かれた頃には竹田城を小字で呼称する古い伝承が残されていたと思われる。

しかし、全国各地にある城郭と同様、竹田城もまたその始築時を示す確たる史料はなく、嘉吉3年(1443)、山名持豊(宗全)によって築かれ、太田垣光景が初代城主に任じられたとする口碑を残すのみである(『兵庫県史』)。

竹田城築城の前後には、但馬守護山名氏と播磨守護赤松氏との間に深刻な対立が生じており、しばしば軍事衝突が繰り返されていた。

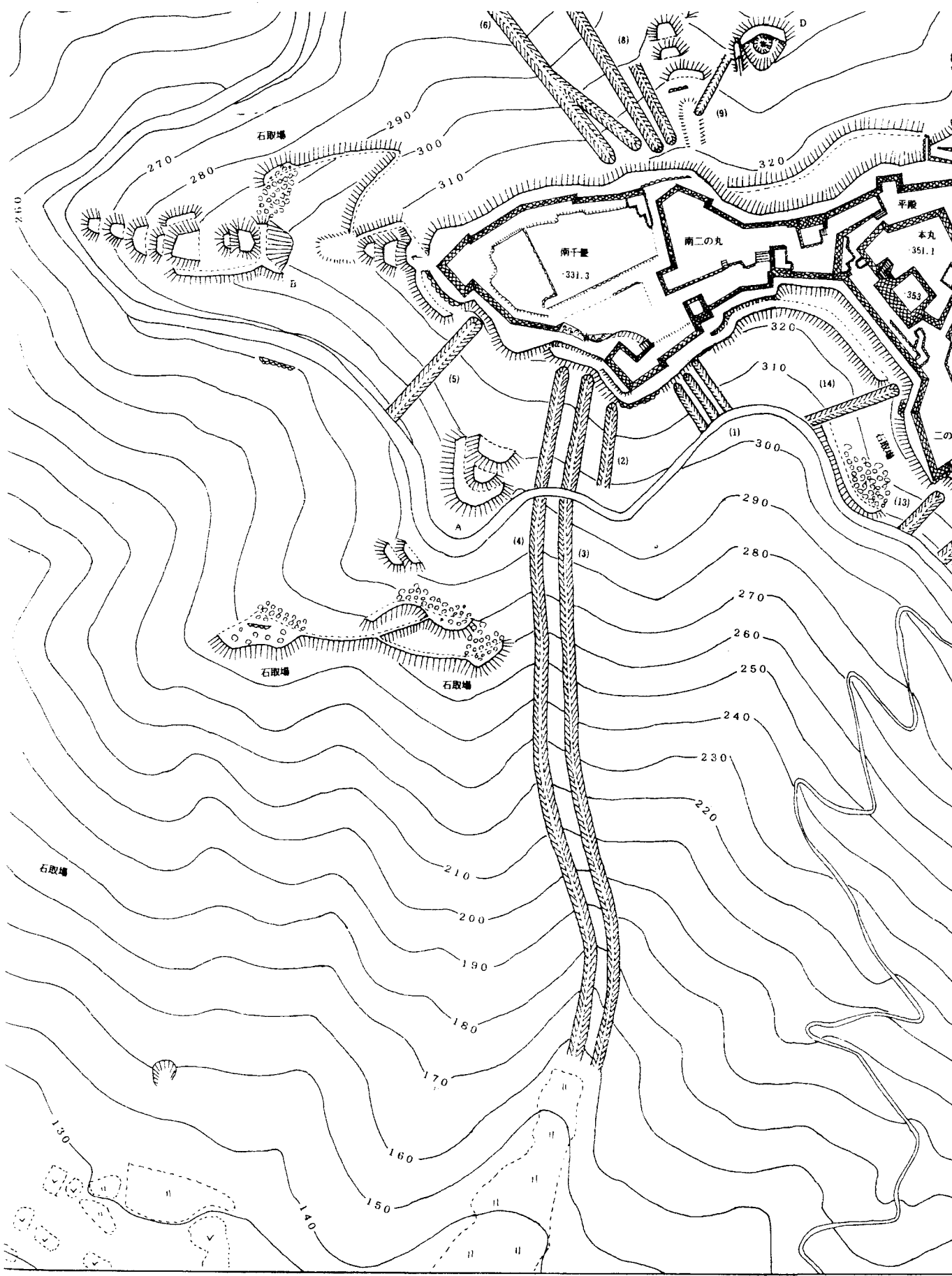
それはまず嘉吉元年(1441)に始まった嘉吉の乱で、同年6月、時の将軍足利義教が重臣赤松満祐らによって暗殺されるという大事件であった。同年8月、幕府から満祐追討の命を受けた山名持豊は、但馬から生野を越えて赤松氏の本国である播磨に攻め入り、同年9月、城山城(きやまじょう)による赤松満祐を滅ぼした(『建内記』)。翌嘉吉2年(1442)10月に、山名持豊は播磨守護として入国し、守護代などを入れて赤松氏勢力の一掃を図っている(『播磨鑑』)。

その後、嘉吉3年(1443)7月には、赤松教政が雪辱を期して挙兵するが、山名持豊軍に破れて自刃する。また、翌文安元年(1444)、赤松満政が三草城に挙兵するが、生野の真弓峠で山名軍に破れて滅亡している(『東寺執行日記』)。さらに享徳4年(1455)、今度は赤松則尚が挙兵するが、これもまた敗れ、備前に逃れて自刃した。

このような社会情勢の中で、竹田城は播磨・丹波・但馬の主街道が集まる交通の要衝の地に築城されたのである。また、さらに城郭として有利な地形の「男山」つまり、独立山塊であるところからも攻守の拠点として重要な位置を占めていた。事実、これ以前にも源平野合戦以来、南北朝時代にかけてたびたび多くの軍兵が山陰道・播但道を往来しており、そしてその都度この近辺において戦乱が頻発していたのである。



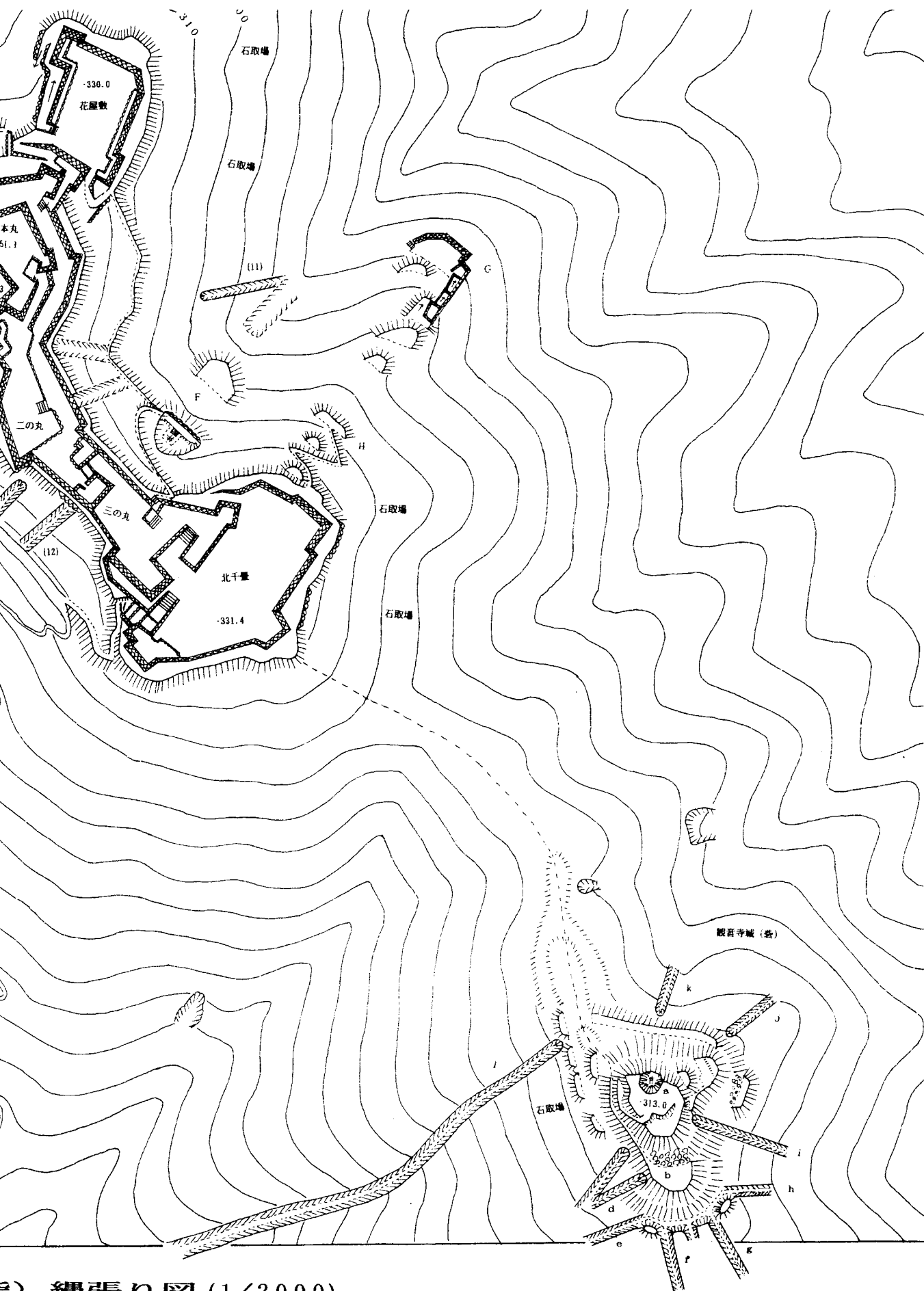
但馬竹田城の構成図 (S = 1/2500)



0

150m

竹田城・観音寺城 (岩)



竹田城（および観音寺山城）の縄張り

城を造る場合、曲輪・石垣・土塁・堀切等を配置する土木工事を「普請」、建物の建築を「作事」という。城をどのような縄張りにすれば防御効果が最大限に発揮されるのかは実は建物の作り方ではなく、土台の曲輪や石垣などの配置の成否によって決まる。つまり、建物を建てる「作事」よりも石垣を配置する「普請」によって城郭の価値が決まるのだ。だから、たとえ建物が残っていなくても、防御の要としての城は石垣や曲輪の造り方の中に築城の秘密が込められており、それを読み解くことこそ重要なのである。

竹田城は本丸から3方向に伸びる尾根に石垣を利用して大きな曲輪（南千畳・南二の丸・花屋敷・二の丸・三の丸・北千畳など）を構築している。また、その支尾根に古い小規模な曲輪・石取場・竪堀・井戸曲輪などの遺構も見られる。

☆A尾根

南千畳の南東に伸びる尾根には、上から14m×6m、7m×6m、8.5m×5.4mを測る三つの小曲輪がある。その下の「石取場」と記載している曲輪は、石材が散乱しており、石を取った後に平坦地を形成した遺構であると考えられる。

南千畳北東の畝状竪堀(1)の中でも小規模なもので、長さ14.5m～20m・幅2m・深さ0.6mを測る。

南千畳東の畝状竪堀のうち、竪堀(2)は幅4m・深さ3m・長さ29mを測る。竪堀(3)(4)は幅4m～5m、深さ2m～2.5m、長さ250mを測る大規模で長大なもので、竹田城下町の内郭の端と思われる谷に落としている。

南千畳南東の竪堀(5)は幅4m・深さ2m・長さ45mを測る。

☆B尾根

南千畳の主尾根には最大12m×10m、最少4m×5mの曲輪が11段ある。中ほどの堀切は幅4.5m・長さ13m・深さ4m（下の曲輪からは1.5m）を測る。堀切の近くには石取場があり、石材が散乱し、石を運んだと思われるルートも確認された。

☆C尾根

南二の丸の尾根には5段の曲輪があるが、いずれも小さいもので7m×5.5mものが最大である。石取場の曲輪は20m×10mを測り、やはり石材が散乱し、石を運んだと思われるルートも確認された。

Dの遺構は横9m・幅4mの平地とその山側の直径6mの落ち込み（窪地）とからなり、井戸曲輪と思われる。井戸を守る土塁と幅4m、深さ1.5m、長さ20mの竪堀もある。

竪堀(6)は幅6m・深さ3m・長さ90mを測る竪堀に、長さ35mの竪堀が合流している。

竪堀(7)は幅4m・深さ2.5m・長さ60mを測り、竪堀(8)は1.5m・深さ1m・長さ30mを測る。竪堀(6)(7)(8)は畝状竪堀を構成しているとみられる。

竪堀(9)は幅10m・深さ4.5～5m・長さ35mを測り、竪堀中、深さ・幅が最大である。

☆E尾根

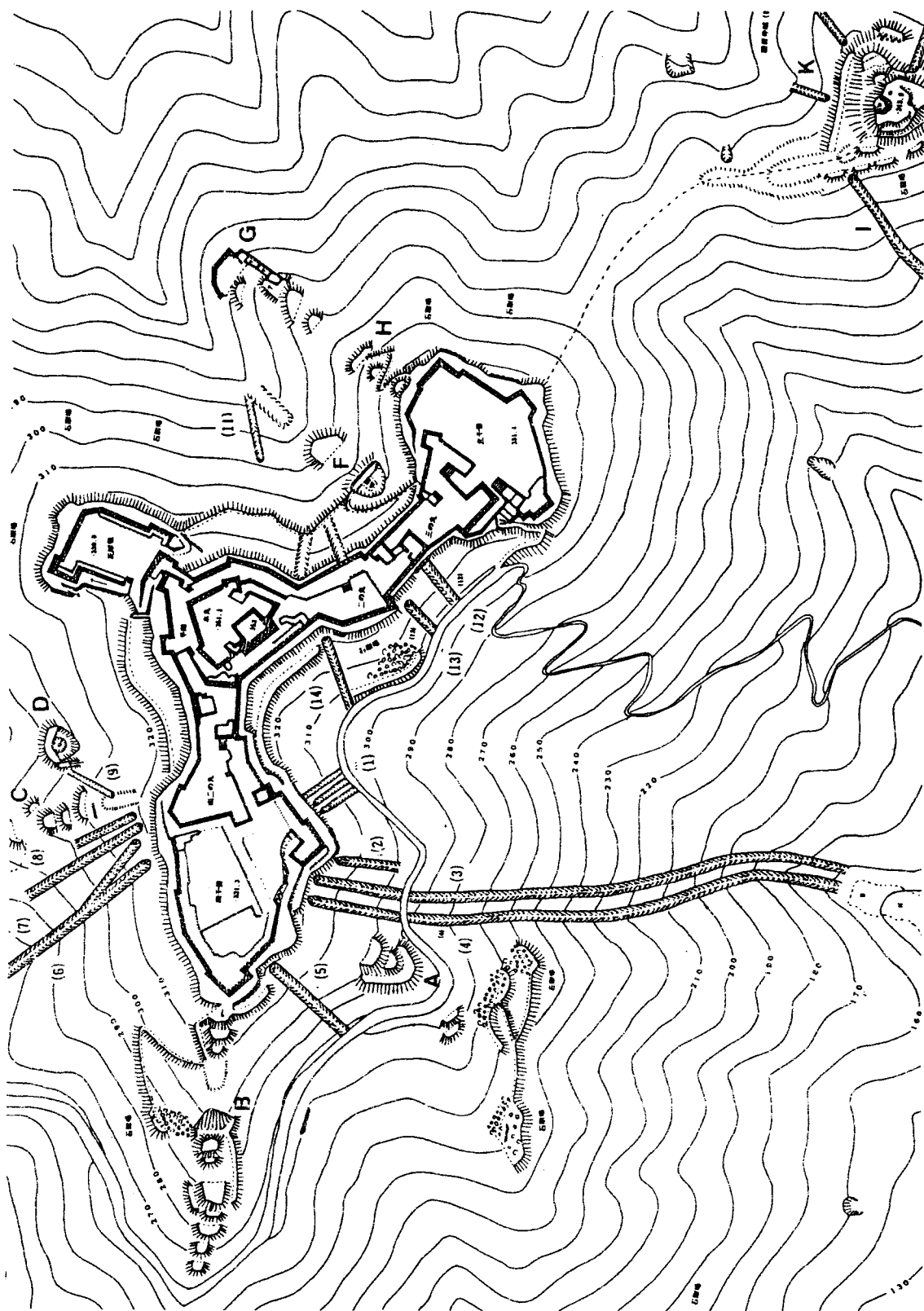
花屋敷西の屋根は急傾斜となっているが、急斜面が途切れるあたりに岩盤を掘り切った堀切と曲輪がある。曲輪は9m×7m、堀切は幅13m・長さ5m・深さ1.5mである。

☆H尾根、登り石垣

北千畳北西尾根には、三つの曲輪が認められ、最大14.5m×3mを測り、犬走りに上る明確な虎口が認められる。

さらにその下には登り石垣がある。石塁は上から3段あり、それぞれ6m×3.5m、6m×2m、6.5m×2m（全長24m）を測り、高さは1.5m～1.8mである。

石塁の下は櫓台と19m×10mを測る曲輪がある。曲輪の石垣の高さは5m～6mを測り、



竹田城縄張り呼称図 (1/3000)

算木積みや、しのぎ積み（鈍角積みがややのっぺりしている積み方）が見られる。全体としては石壁をもつ保塁とでもいうべきものである。尾根の北側と東側を防御する機能を持ち、井戸曲輪を守るための保塁であろう。

また、三の丸北西の谷には、井戸曲輪の遺構がある。井戸曲輪は1辺5.8mのほぼ正方形の落ち込みと、横幅16.5m・奥行6.4mの平坦部からなる。平坦部の谷側には7.5mにわたって石列が見られる。平坦部からその窪地には2.2m幅の4段の階段があり、水汲み場は1辺1.2mの方形の石組でできている。また、井戸曲輪を防御するための15m×11mの曲輪も設けられている。さらにその北側には堅堀と谷部を掘り込んだような堅堀状の遺構が見られる。

☆二の丸・三の丸の南斜面

三の丸の南斜面には2本の堅堀がある。②は幅3m・深さ1m・長さ20mを測り、堅堀を埋めて石垣を構築しているようである。また堅堀③は幅3m・深さ1.3m・長さ18mを測る。

二の丸南斜面には石取場と堅堀④がある。堅堀④は幅3m・深さ1m・長さ45mを測る。

☆観音寺山城（砦）

観音寺山城は総石垣の竹田城と谷をはさんでその北東、標高313mに所在する。室町～戦国期の太田垣時代には、竹田城の一砦を構成していたと思われるが、ここでは総石垣の竹田城と区別する意味で、観音寺山城と呼称する。

観音寺山城の主郭aは29m×20mを測る曲輪と上端1辺8m、下端6.5m×3mの落ち込みからなる。この落ち込み遺構は定かに判明しないが、井戸曲輪ではないかと思われる。また、明確な虎口も認められる。

主郭東側の曲輪bは18m×11mを測り、曲輪の主郭側には石材が散乱している。この石材は主郭の石垣が崩壊したものではなく、石を採取した石取場であろうと思われる。

曲輪bを防御するためにc～hの堅堀群が配置されている。

堅堀cは幅3m・長さ28m・深さ0.8mを測り、幅2.2m・長さ17m・深さ0.8mの堅堀dと合流している。堅堀e～hは一連のもので、場所によって異なるが、深さ1m以内の横堀から4条の堅堀を落としたものである。サイズは堅堀eが幅3m・深さ2m・長さ27m、堅堀fが幅3m・深さ2m・長さ28m、堅堀gが幅3m・深さ1.5m・長さ33m、堅堀hが幅3m・深さ1.5m・長さ21.5mである。

堅堀iは幅3m・深さ1.3m・長さ37mである。主郭aを守るためのものである。

主郭下の帯曲輪を防御する遺構として堅堀jとkがある。堅堀j幅4.5m・深さ1m・長さ20m、堅堀kは幅3.5m・深さ1m・長さ15mを測る。

堅堀lは幅4.5m・深さ2m・長さ150mを測る大規模なもので、城下町内郭の北側ラインを構成しているものと思われる。

観音寺山城築城は、時期的には3時期が考えられる。すなわち室町期にa、bをはじめとする曲輪がつけられ天正初期(1573年)に放射状堅堀群、天正5年～8年(1577～1580)段階にe～hが構築されたものと考えられる。さらに、堅堀lは文禄期以降城下町内郭を画する山側の防御ラインとしてつけられたものと推定できる。

★まとめ

現在、竹田城・観音寺山城に残存している堅堀群を除く小規模な曲輪・堀切および未発達な虎口から考えると、これらの遺構は室町期太田垣氏によって築城されたものと推察される。しかし、観音寺山付近の古い曲輪の存在を考えると、南北朝期の頃からすでに古い城郭を構築していた可能性も否定できない。

天正初期(1573年)にいたり、太田垣氏によって竹田城および観音寺山城堅堀群が曲輪の

防御を高めるために構築されたものと考えられる。その後、天正5年～8年(1577～1580)段階に太田垣氏によって観音寺山城の横堀+堅堀群が構築されたものであろう。また、竹田城総石垣の下部にも同様の遺構が所在する可能性がある。

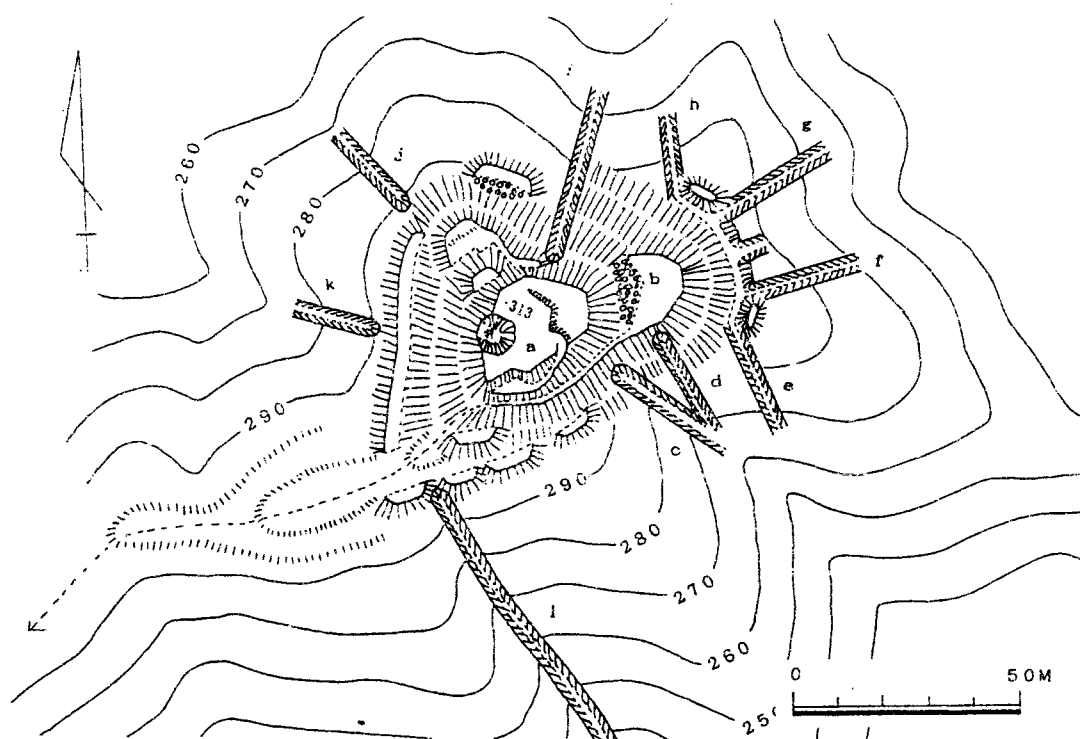
したがって、竹田城、観音寺山城の小曲輪、堅堀群の配置から考えると、総石垣の竹田城の下部には、太田垣時代の主郭を中心とする竹田城の本体の曲輪群が存在することは確実であろう。さらに竹田城は、織豊政権によって天正8年(1580)以降、文禄から慶長5年(1592～1600)を経て、総石垣の城に大改修される。

北垣聰一郎氏によれば、登り石垣の算木積みなどは、竹田城の総石垣築造時期とあまり異ならないとのことだが、竹田城石垣よりも石が小さいように思われる。時期的には倭城との関連から文禄以降(1592年～)の築造であろう。

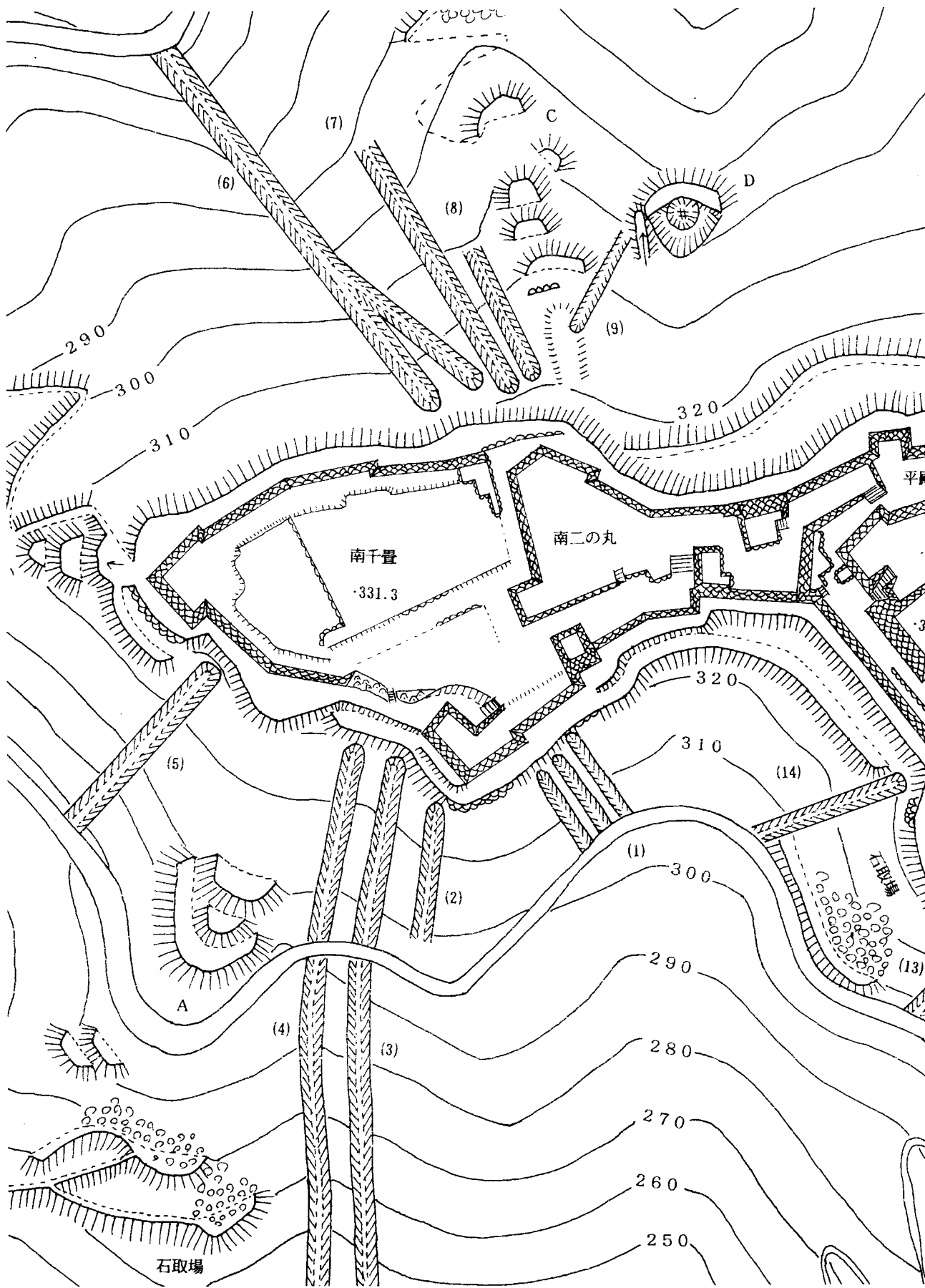
全長250mもの長さをもつ竹田城の堅堀(3)(4)、ならびに観音寺山城の堅堀1は、城下町の内郭ラインを画定する堅堀であり、倭城以降に出現する遺構であるといわれる。但馬では竹田城ほど長大ではないが、出石城にその類例がある。時期的には文禄以降(1592年～)と考えておきたい。

井戸曲輪は、いつの時期に使用されたものかは判然としないが、井戸曲輪として独立して造られ、井戸曲輪を防御する登り石垣の存在などから、天正8年(1580)以降も使用されていたことは確実であろう。また、石取場遺構は花屋敷斜辺斜面、北千畳斜面、表米(ひょうまい)神社の斜面などにも見られ、今後さらに増加するものと思われる。したがって石垣の石材は、古城山自体と観音寺山から供給されたことは確実である。

登城ルートについては、太田垣時代は尾根の方向から登城していたものと思われるが、天正8年(1580)以降の織豊期には北千畳南東の谷(現在の登山道)が居館からの登城ルートになったと推察される。



観音寺山城縄張り図(1/1700)



竹田城の総石垣部

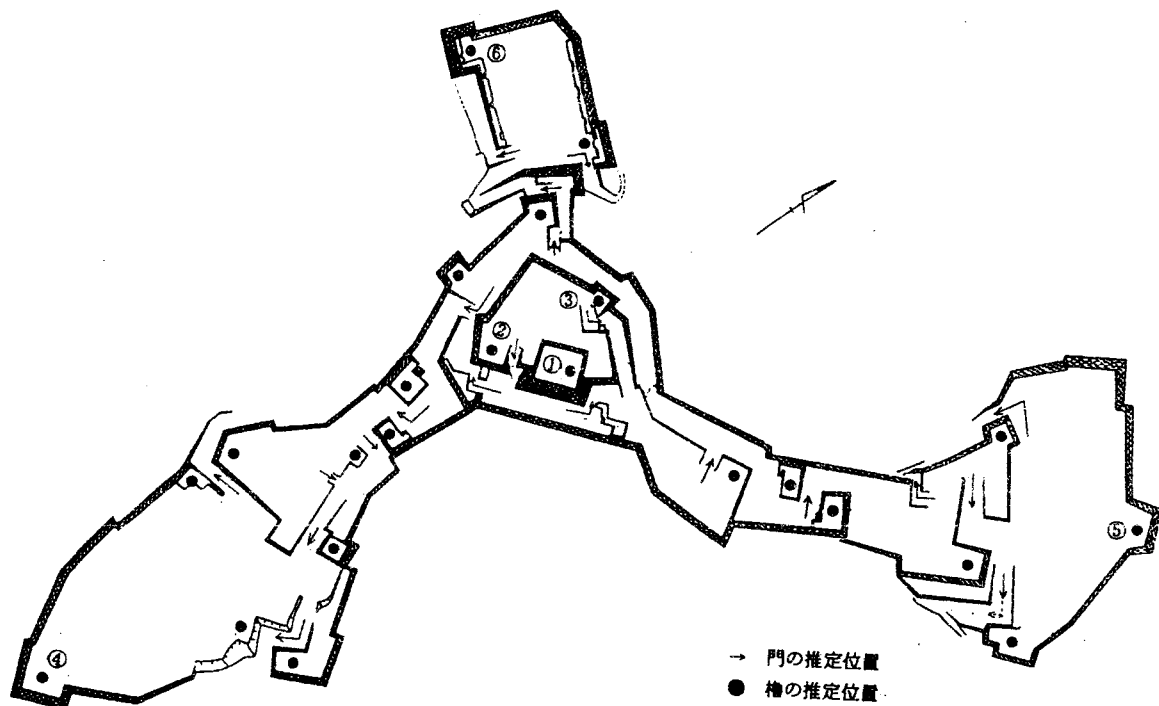
☆概略

竹田城は標高358mの古城山山頂に築かれた山城である。尾根の最高所に本丸を置き、城下町を眼下に望む本丸の正面に天守台を設定している。それぞれ南千畳・北千畳・花屋敷と呼ばれる曲輪が連続して終わる。とくに南千畳・北千畳方向には、食い違い虎口を連続的に設定し、本丸にいたる間を防禦している。

花屋敷は本丸の背後を押さえる搦手(からめ)となっている。とくに防禦に力点がおかれ、竹田城では花屋敷だけに石壁に鉄砲狭間を持つ構造物がある。また、本丸にいたる虎口は、櫓台を伴って防禦を固めている。さらに曲輪間の高低差は14mもあって堅固である。

本丸は南千畳と北千畳を両翼として、城下町からの敵の侵攻を防ぐ。本丸の南辺の位置には天守台が迫り出すように造られ、両翼を見通す指揮所となって実戦を重視した構造となっている。また、城郭全体に石垣が構築されたいわゆる総石垣造りの城郭である。とくに本丸部分は厳重であり、二重に石垣がめぐっている。

本丸から南千畳方向には直線距離が185m、本丸から北千畳方向には180mあり、ほぼ等距離に造る規則的な構造となっている。本丸から花屋敷方向には85mの直線距離を持っている。さらに高低差をみると、天主台が標高358m、南千畳・北千畳・花屋敷の3曲輪がほぼ同じで標高331m付近となっており、天主台との高低差はいずれの方向とも約27mとなるように統一的に造られている。



櫓台と門の設定図

☆本丸地区

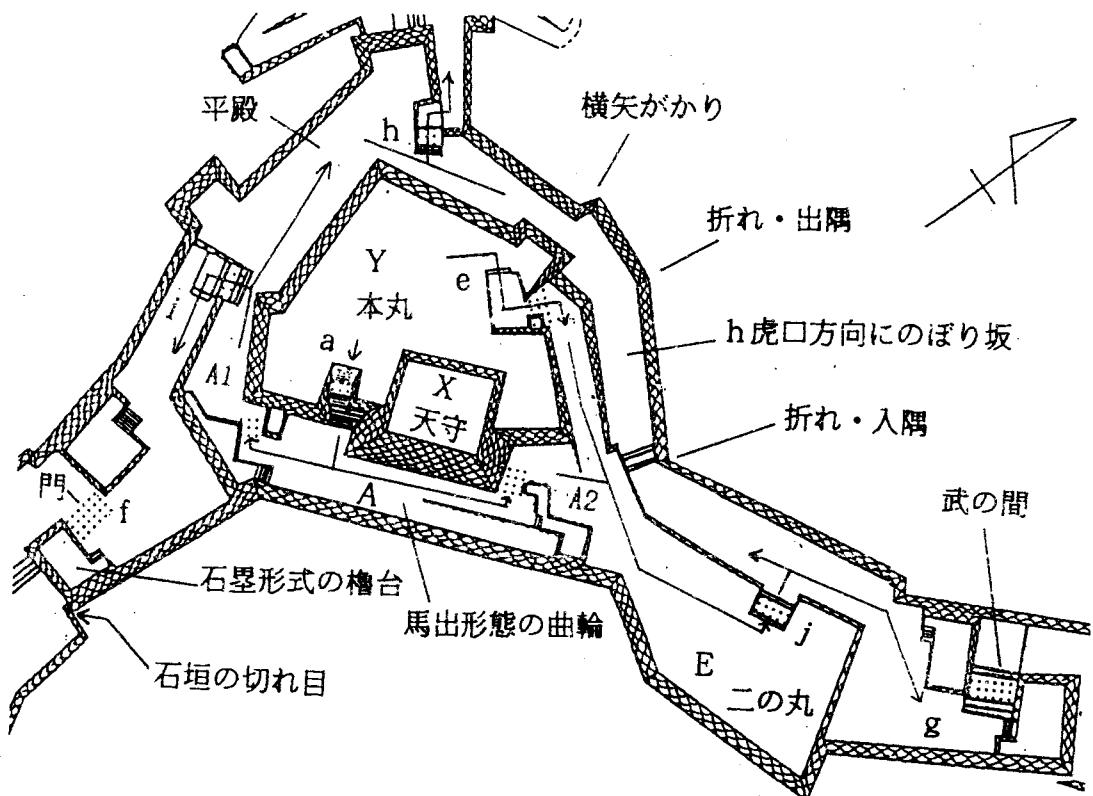
曲輪からみた本丸（高見殿）は天守台であるX曲輪と、いわゆる本丸といわれるY曲輪の二つの曲輪からなる。しかし、本丸前庭部として造られたAやEの曲輪も南二の丸や南千畳から独立した空間をもっており、X曲輪・Y曲輪・A曲輪・E曲輪を総称して本丸地区と考えてもよい。この本丸地区に入るには、A1虎口かj虎口のいずれかしかない。

ここで本丸地区の通路空間を中心とした防御ルートを考えると、まず、X曲輪にaとeの二つの虎口がある。A曲輪にもA1とA2の二つの虎口がある。またj虎口もh方向とg方向に二つのルートを選択できる。さらにA1虎口もiないしh方向に進むことができる。

一方、h虎口はiとgとd虎口から進んできた三つのルートが交わる地点となっている。つまり、本丸地区では進行方向が1方向ではなく、2方向に進むことが可能である。換言すれば、本丸地区の通路空間では、T字路を連続させて本丸を囲み込んでいる。これは三の丸曲輪や南二の丸曲輪が直線と折れの連続だけで構成されていると対照的で、本丸地区の防御性を考えてより複雑な構造となっている。

ところで、a虎口は21段の高い階段になっているが、表面観察だが、その階段の西側部分の石垣を見ると古い石垣ラインがあり、石垣を前に積み出した状況が認められる。また、A2虎口付近にも石垣に沿って石列が見られるので、本丸地区の現在の石垣の中にもさらに古い時代の石垣が埋没している可能性がある。

一方、f虎口やc虎口にも曲輪の両側に石垣の継ぎ目（切れ目）がある。こうしたことから、総石垣を持つ現在の竹田城が唯一の姿ではなく、古い石垣を拡張して新しい縄張りを設定し、石垣を持つ曲輪が造られたと推定できる。



本丸地区曲輪図 (1/1000)

☆天守台

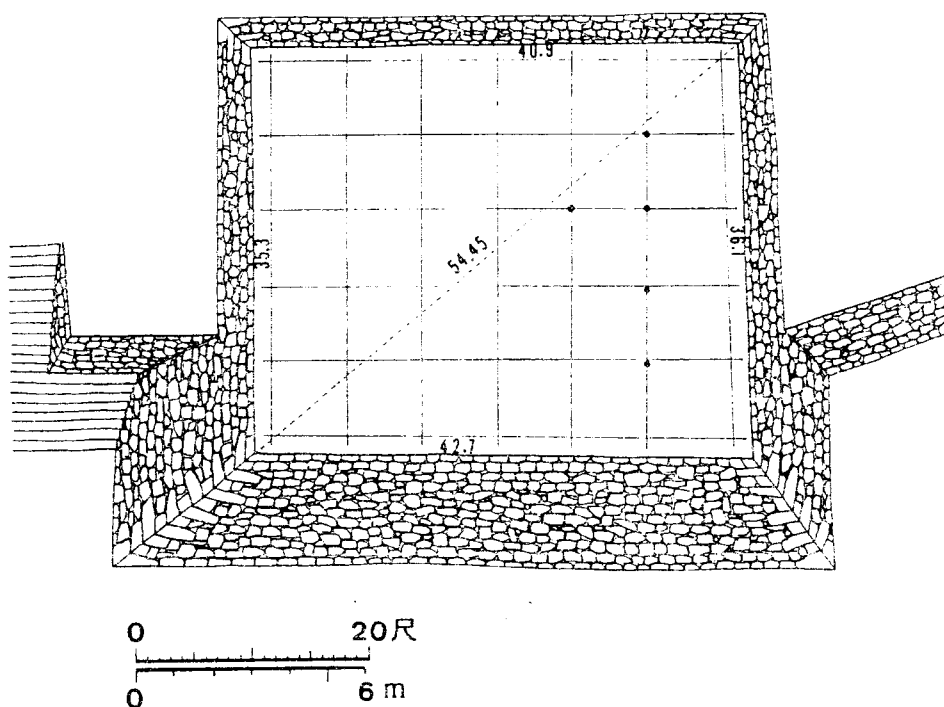
近世の山城で確実に天守があったことが知られているのは、高取城・鳥取城・村上城・豊後岡城・備中松山城などである。このうち高取城天守は、記録によると、初層は8間×7間2尺、二層は7間×6間2尺、三層は5間×4間2尺であった。これは残存する高取城天守台の規模に合致している。

竹田城の天守台は本丸（高見殿）の東南部、標高358mのところに位置している。昭和45年（1980）、当時の日本城郭近畿学生研究会（現在の城郭談話会）が巻尺で測量したところ、下図のように長辺が42.7尺×36.1尺、本丸（高見殿）の地面上の高さが9尺余、外側（東南辺）に面する石垣の高さは30尺以上もあった。

天守台の上面の形状は長方形で礎石も見られる。礎石はすべてそろっているとはいいがたいが（現状は5石残存）、配列状況から柱間6尺5寸で、6間×5間の規模とする計画であったと推測できる。もし、竹田城の天守台が6間×5間の規模であったとすれば、二層あるいは三層の望楼式天守閣が想定できるが、この城に天守が建てられていたという記録も伝承も残っていない。城跡から多数の瓦辺が出土しているので、天守・櫓・城門・塀等の建造物が存在した可能性は認められても、安易な考察は慎まなくてはならない。事実、天守台があっても天守が建られなかった例が数多く存在する。例えば、明石城・赤穂城・三原城・福岡城・唐津城・甲府城・仙台城などがそうである。

たとえ、瓦が出土しており、しかも天守台に礎石があったとしても実際に天守閣があったかどうかは分からない。ことによると天守台だけであった可能性もあるのだ。

竹田城に天守があったかどうかは今後の検討課題である。



竹田城天守台実測図（1/200）※数字は尺単位、黒丸が残存礎石

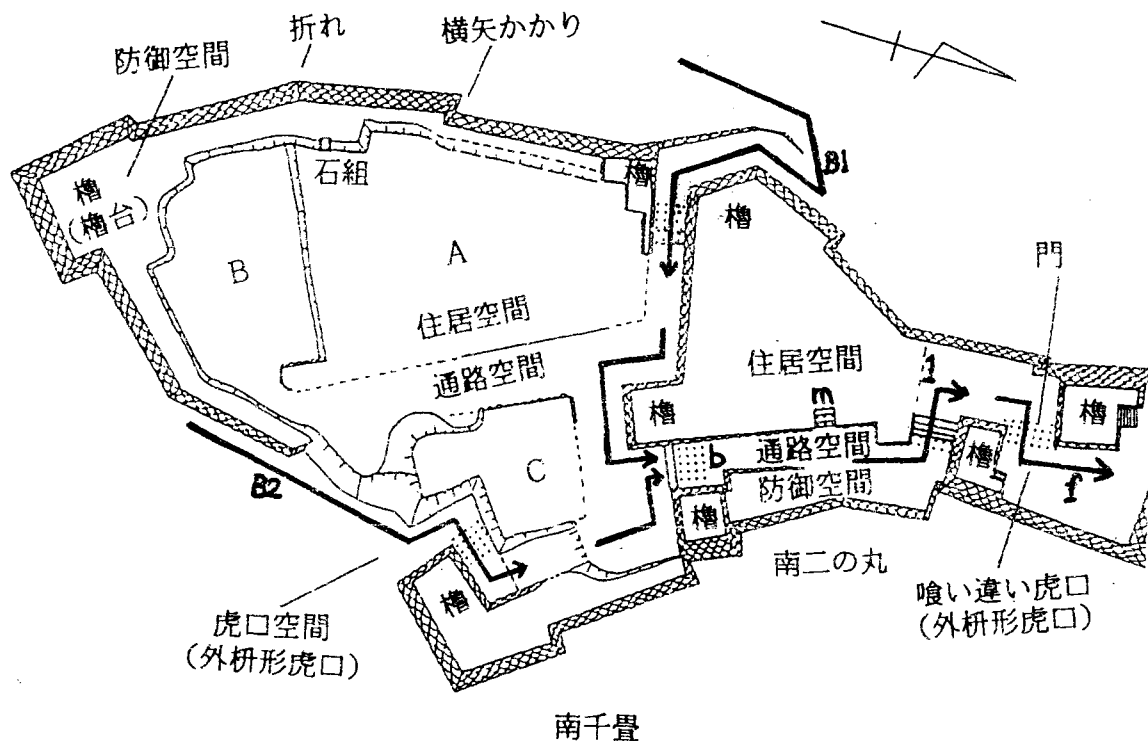
☆南二の丸・南千畳

南千畳は石垣が途切れており、従来、理解しにくい区域とされていたが、近年の調査によって通路空間とみられる区画が発見され、ここにある曲輪を四つの機能空間に分けて理解することが可能となった。

まず南千畳C地区で、L字形続く低い石垣が発見され、A地区でもこれに対応する石列があった。これによりAC間に通路空間が想定できるようになった。この通路空間はb・B1・B2の3虎口およびB地区、櫓台をつなぐ幹線通路となっている。通路はAC間で7.5mあり、bで8.5m、B1で3.9m、B2で5mある。

住居空間は通路空間によって分離されたABCの3区分ある。AB間は低い石組による段差となっているようだが、土に埋もれて確認できない。こうした住居空間と曲輪の先端部の間には、2m~2.5mの通路が確保されている。B1虎口からAに沿って曲輪の先端部の櫓台にいたり、bに沿って通路空間までのびている。このように南千畳の曲輪周辺部である石垣に接した部分では櫓と櫓をつなぐ通路が確保されており、これは防御空間ともいふべき区域である。一方B2虎口では、石垣をもつL字形の櫓台が張り出しているが、その反対側は岩盤を削ってL字形に整形しているものの石垣が積まれていない。総石垣の竹田城で、ここだけが石垣の未構築の場所となっている。

ここから南千畳に入るルートを考えてみると、3折れする必要がある。そのままb虎口に入るには、さらに2折れが必要だ。一方、B1虎口から入る場合は1折れないし2折れで入ることができる。しかしb虎口に入ろうとすると、南に張り出した櫓台に遮られて3折れする必要がある。こうした進入ルートを考えてみると、通路空間が居住空間と機能的に分離していると同時に、南二の丸と一体となってB1・B2虎口を防御する構造になっている。



南千畳・南二の丸曲輪図 (1/1000)

☆南千畳・北千畳・花屋敷（馬出し形態の曲輪）

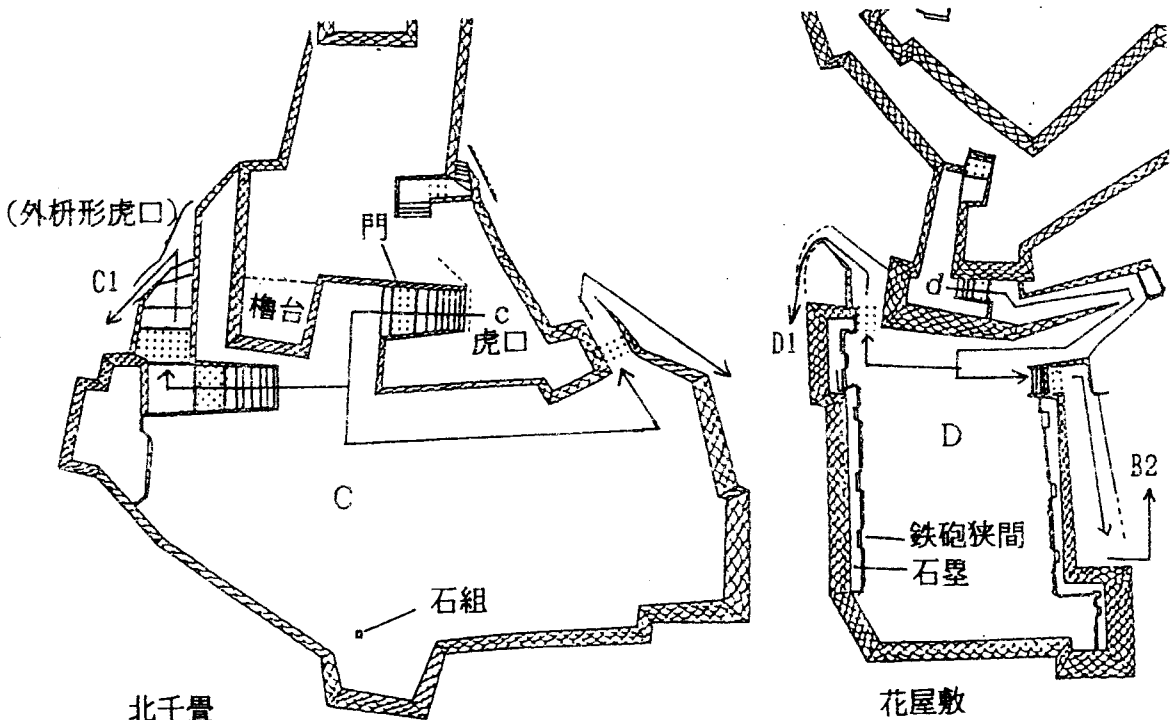
南千畳(B)・北千畳(C)・花屋敷(D)の3曲輪はいくつかの共通点があげられる。

- (1)標高がそれぞれ331.3m、331.4m、330mでほぼ同一である。すなわち天守台との比高差を約27mに設定している。
- (2)この3曲輪は構造的に竹田城の中では時期が新しい。南千畳・北千畳では石垣の継ぎ足した状況が見られ、とくに花屋敷では、曲輪が方形プランになっているだけでなく、鉄砲狭間が造られている。
- (3)この3曲輪はすべて二つの虎口をもっている。さらに、その虎口は原則として1段上の曲輪に接した両側サイドに設定されている。
- (4)こうした曲輪の虎口が、1段上の曲輪に入る1ヶ所の虎口と対応している。つまり、上の曲輪の入口にある虎口は防御用の虎口であり、BCDの虎口は出撃用の虎口である。以上の関係を模式図で示すと下図のようになる。

ここでは堀を伴っていないが、防御用の虎口と出撃用の馬出し形態の曲輪、そしてその曲輪の両サイドに出撃用の虎口がつく構造になっている。竹田城は防御用の虎口と馬出し形態を持つ曲輪をセットにして利用され、本丸から3方向へのびる城郭の先端部の曲輪を防御する構造となっている。

さらにこうした曲輪が高低差を統一させて築造されている。つまり曲輪の平面プランと立面プランを企画的に設計していることがわかる。こうした曲輪の構造は竹田城の中でも新しい要素を持つものである。二つの要素を統一して造る事実を考えると、自然地形に制約されて築造される山城でありながら、規則的な構造プランである。換言すれば、山城としての自然地形の制約を乗り越えて、規則性のある近世城郭プランとなっている。

こうした形態を考えると、文禄段階のものとは考えづらく、慶長段階の可能性が高い。



馬出し形態の曲輪構造図

竹田城出土の瓦

竹田城に登ると瓦を踏まずに歩くことはできない。それほど瓦の量が多い。そしてこの瓦こそ竹田城に瓦葺きの豪壮な建造物があったことを偲ばせるほとんど唯一の遺物である。

これらの瓦については様々な形状のものがあるが、多くは丸瓦と平瓦である。こうした瓦の軒先に出る部分が軒瓦（軒平瓦・軒平瓦）である。竹田城の軒丸瓦はおおむね三ツ巴文、軒平瓦は均整唐草文で、燻（いぶ）されたものが多く、だいたい黒色を呈している。

瓦の製作年代を決定する上において重要なことは、製作技法を検討することである。丸瓦の凹面には、粘土に含まれている砂粒が移動した痕跡がある。これは瓦を製作するときに、一定の厚さの粘土に切り分けることが必要で、その切り分ける際に立方体の粘土の塊から糸ないしは鉄線で引いて切り取ったときの痕跡なのである。つまりロクロで茶碗などをつくる際に粘土塊から切り放すときにつく「糸きり」痕跡と同じ理屈である。

そしてこの痕跡が、瓦に対して斜めについているか、それとも並行についているかで製作した時期が決まる。すなわち、粘土を切り取る際に一定に力が加わっていればその痕跡は並行になるのだが、一定でなければ斜めになる。並行な痕跡は技術的に発展した時期のもので、斜めの痕跡は技術的に稚拙な段階のものである。したがって前者が新しく、後者が古いことになる。

中世の瓦の研究者は、前者、つまり新しいものを「コビキ（備前）B種」と呼び、後者、つまり古いものを「コビキA種」と呼んでいる。定説では、コビキA種がコビキB種に移り変わる時期は、天正13年（1585、秀吉が関白となつてほぼ全国統一した年）を前後するところとなっている。そして、竹田城から出土する瓦はすべてコビキB種の技法が使用されているのである。つまり、竹田城の瓦が製造されたのは天正13年（1585）以後、あるいは文禄・慶長期（1592～慶長5年＝1600）にまで入る時期と考えられる。

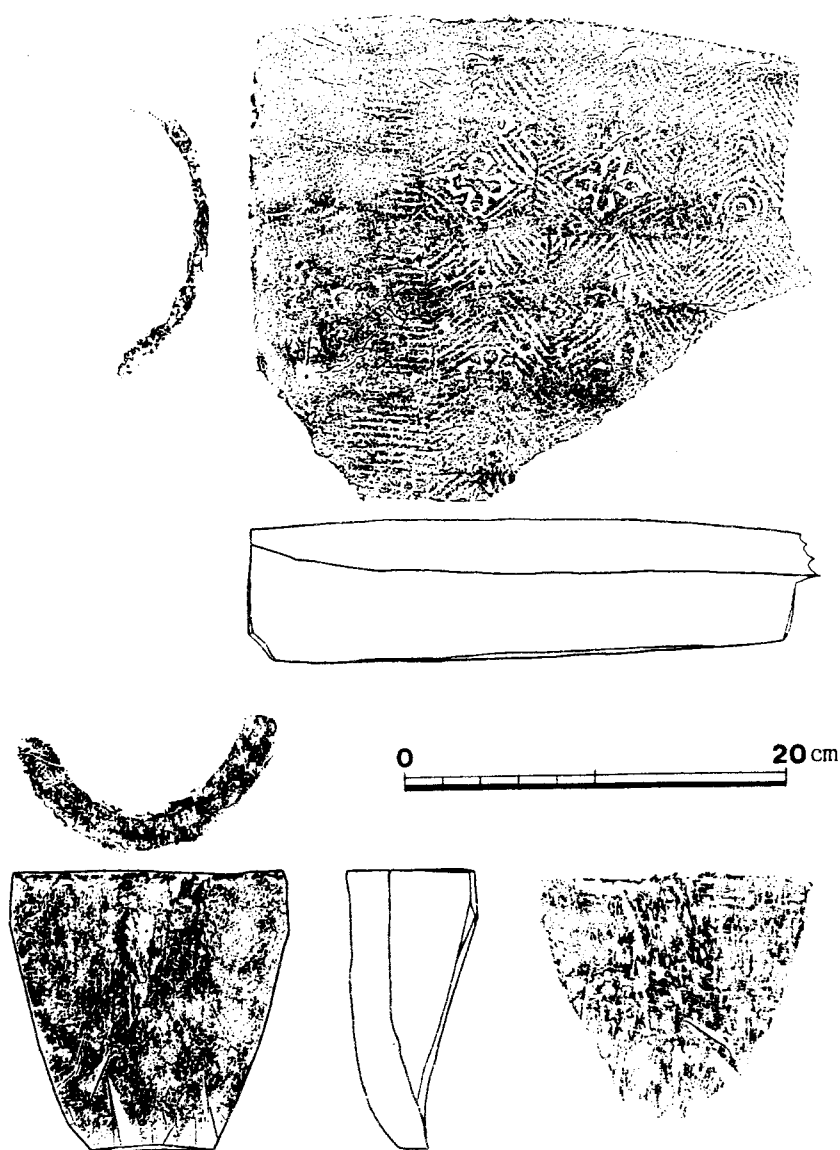
竹田城の瓦は、このほかに道具瓦（菊文差瓦・鳥衾（とりびさし）瓦・鬼瓦・鯪（しや）瓦など）も出土しているが、その中でもとくに注目されるのは少量の高麗瓦出土していることである。高麗瓦はその表面に1辺7cmの方形の十文字の花弁状や、同心円状の叩きを施す特徴がある。しかし、竹田城のものは土質や焼成状態から朝鮮半島で製作されたものではなく、国内で生産された可能性が高い。これは竹田城主赤松広秀が朝鮮半島に出兵した際、瓦工人を連れ帰ったことを暗示しているようである。また、姜沆（かん）『看羊録』の中で、広秀は「但馬の自領に孔子廟を督して立した」と記しており、もし、孔子廟（にらひやう）が城内にあったならば、少量の高麗瓦が出土しているのも説明できる。

その他の竹田城関連出土遺物

竹田城から出土したその他の遺物では、井戸から出土した備前焼きの破片や、北千疊から採集された中国製の青花皿、および土師器の破片がある。いずれも16世紀後半の時期と考えられ、竹田城の石垣城郭に伴うものと考えられる。

その他、竹田城周辺から出土した遺物では、殿町における城下町の調査、ムクノ木遺跡（現在ゴルフ場になっている）の発掘調査がある。

城下町の調査では、石組の井戸とともに16世紀後半の遺物が出土した。ムクノ木遺跡でも天正14年（1586）段階に建立された表米（ひやまい）神社に関する遺構に伴って、16世紀後半の遺物が出土している。また、この遺跡からは竹田城から出土した瓦と同一のものが出土している。近くに「瓦師（かわし）」という地名があることから竹田城に供給した瓦工房があった可能性もあるが、これは今後の検討課題である。



上. 丸瓦
(高麗瓦)

丸瓦で端を欠損しているが、凸面は端部は縦方向にナデを施し、他は全面にタタキを施している。原体中央に十文字、花卉状のもの、同心円状の彫刻を施し、周囲は綾杉状に彫刻しており、明らかに高麗瓦である。

下. 丸瓦

凹面は横位のケズリ（コビキB）とともに布目痕が残る。

竹田城跡採集瓦実測図（1/4）

《参考》太田垣氏

但馬の大族、但馬国造日下部氏の裔と称する。すなわち本姓は日下部姓である。和田山町牧田の赤淵神社には『多遅麻国造日下部宿禰家譜』という系図が現存する。これによると、日下部氏は赤淵神社の祭神表米(ひょうまい)親王を始祖としている。日下部氏は南但馬の首長的地位を占めながら、次第に但馬全域に勢力を広めていったという。太田垣氏と同じく山名四天王の一人の八木氏や、後に但馬から越前に移って戦国大名となった朝倉氏などもその一支流である。

数多く伝わる「日下部氏系図」によると、「光村(建屋太郎)－光忠(石和田)－光保(太田垣)」などとあって、建屋(たきのや)・石和田・太田垣を同族としている。

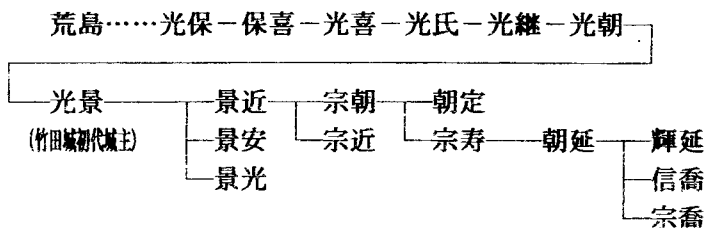
『但馬国大田文』には「太田垣」の名は見えないが、「尊勝寺領養父郡建屋荘下司建屋五郎大夫女子」「同新莊地頭石和田又太郎光時」は、ともに御家人としてその名が見えることから、この近辺を本拠とした建屋氏あるいは石和田氏の庶流と思われる。

しかし、山名氏の但馬制圧に協力する過程で宗家を凌いで強力となり、明徳の乱等での活躍によって垣屋氏・八木氏・田結庄(たゆしやう)氏と並んで山名の四天王と呼ばれるほどの勢力をもつまでに成長、丹波・播磨への通路を押さえる竹田城を本拠とするようになった。「太田垣」の名が文献で確認できるのは、延文3年(正平13年、1358)に祐徳寺へ建屋新荘のうち田1段を寄進した「太田垣光善」、貞治2年(正平18年、1363)に建屋下司職内の田1段を寄進した「太田垣実阿(光善の法名の可能性もある)」がその早い例である。

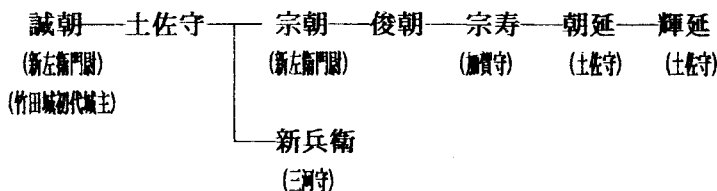
また、嘉吉3年(1443)以後、竹田城を預かったという「太田垣光景」、応仁元年(1467)の竹田城主「太田垣土佐守」、その嫡子「新左衛門宗朝」、二男「新兵衛尉」、備前守護代として山名俊豊を擁した「太田垣美作入道」、その舎弟「三河守」、同「新右衛門尉」、同「左京亮」らの名が諸書に散見できる。このうち美作入道は『翠竹真如集』に見える法諱を「宗収」あるいは「徳叟」と号した人物らしく、若年に山名時熙に仕え、老年には幼主山名俊豊をよく補佐した。この美作入道の子に宗幸、甥に光久がいたという。

『日光院文書』にも光朝・時久、氏定・孝定、三河入道浄口・紹悦らの名が見えるが、一般に知られる「太田垣氏系図」には光朝を除いてその名を欠き、不明な点が多い。

太田垣氏系図Ⅰ (石田松蔵『但馬史』巻4より)



太田垣氏系図Ⅱ (宿南保『養父町史』竹田城主太田垣氏略系図より)



《考》太田垣氏の本拠・安井谷

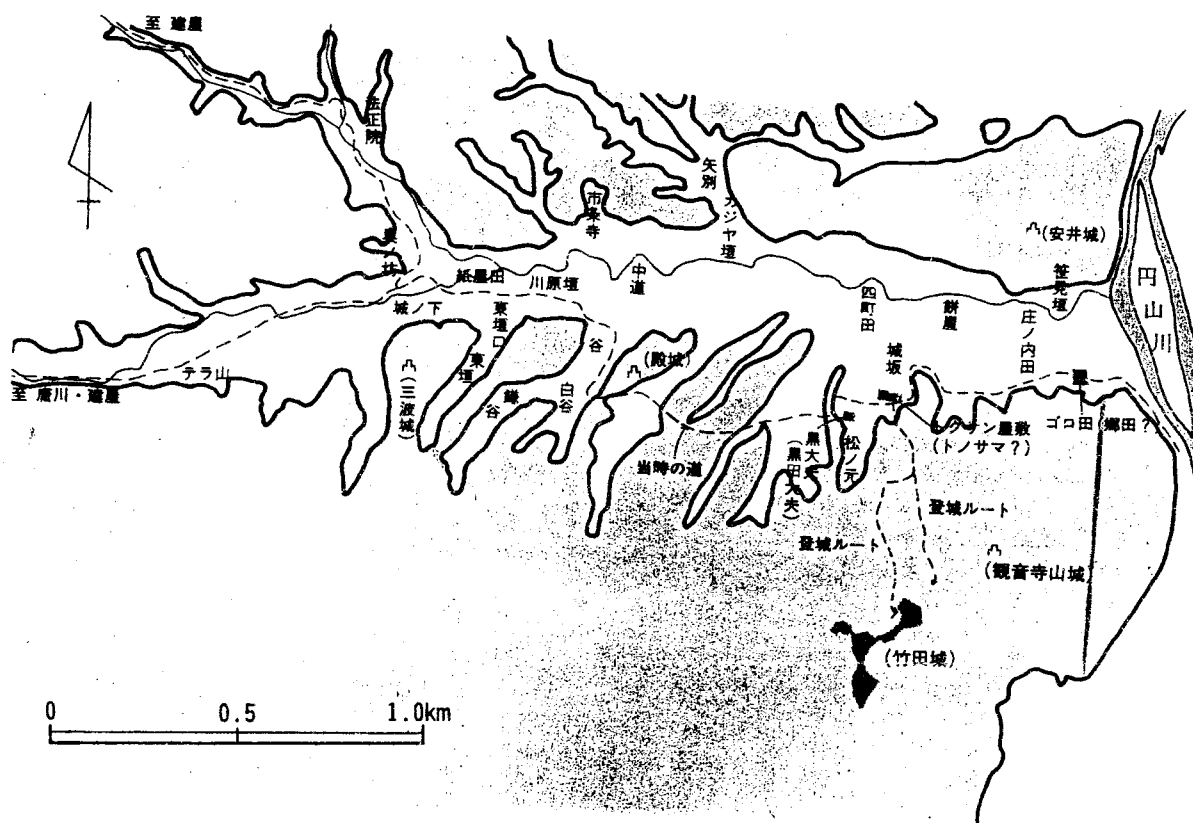
竹田城主太田垣氏の本拠地は養父町建屋(たきのや)である。この建屋に通じる唐川から谷を一つ越えたところが殿村を中心とする安井谷である。そして、太田垣氏が最初に本拠を構えたところがこの安井谷と考えられている(『和田上道氏日記(上道陳兵衛覚書)』には、天正5年(1577)大手を竹田に付け替えたという記載がある)。

安井谷は竹田城の北に位置する東西約3kmの狭長な谷である。この谷には三つの集落があり、谷の入口から安井(やい)・殿(との)・三波(さんば)である。昔は安井は安井下村、三波は奥村と呼ばれていた。

安井谷には三つの城郭遺構があり、谷の入口から安井城(加都字向山)・殿城(殿字谷)・三波城(三波字東垣・北谷)と続く。殿城は妙見社のある丘陵上にあるが、天正期後半の特色をもつため初期の太田垣氏の居館とはみられない。

残りの安井城・三波城と竹田城を結ぶと安井谷をほぼすっぽりと包み込む三角形を形成し、谷全体を防御する一関係になる。安井城側には「笹見垣」「カジヤ垣」、三波城側には、「東垣」「東垣口」「川原垣」など、城下町の町域を示す地名が残っている。

そして、竹田城のほぼ真北の谷筋には「城坂」「トクサン屋敷」「黒大夫」「松本」などの地名が残っており、地名学的には初期太田垣氏の居館跡として有力な候補地となっている。



安井谷に残る城郭遺構と推定居館区域

《参考》羽柴秀長(天文9年~天正19年[1540~1591])

戦国・安土桃山時代の武将。豊臣秀吉の異父弟とされるが、秀吉の父弥右衛門の死が天文12年(1543)なので秀長も弥右衛門の子と考えられる。母は「なか(大政所)」。通称は小一郎で、はじめ長秀、天正12年(1584)からは秀長と名乗っている。

譜代家臣を持たない秀吉に早くから仕え、天正2年(1574)の伊勢長島一向一揆攻めでは丹羽長秀・前田利家らと先陣を務め、同5年(1577)の第1次但馬攻め、同8年(1580)の第2次但馬攻めでは総大将を務め、その勝利後、竹田城・出石城の城代となった。織田信長の中国攻めでは、兄秀吉が山陽側を、弟秀長が山陰側を攻めるという兄弟間の分業が見事に図られ、秀吉が総大将、秀長が副将という戦いが数多くある。天正13年(1583)の四国攻め時は、秀吉が総大将の予定であったが、急病で秀長が代わって総大将になっており、まさに秀吉の分身であった。

四国攻めの勝利後、それまでの紀伊・和泉64万石に大和一国が加増され、一躍110万石となり、居城をそれまでの紀伊若山(和歌山)から大和郡山に移した。

天正15年(1585)の九州攻めにおいても15万の大軍の将として島津攻めの先鋒となり、戦後、従二位・権大納言に叙任され、「大和大納言」と称された。秀吉の補佐役として敏腕を発揮したが、病気には勝てず天正19年(1591)、大和郡山城で没した。

《参考》桑山重晴(大永4年~慶長11年[1524~1606])

戦国・安土桃山時代の武将。

尾張国海東郡桑山の出身で、以則の子。生年には大永7年(1527)説もある。豊臣秀吉に仕え、天正11年(1583)の賤ヶ岳の戦いの戦功で竹田城を与えられ、従五位下・修理大夫に叙任した。

秀吉の弟羽柴秀長の下で各地の戦功をあげている。天正13年(1585)、秀吉が紀伊和歌山を征服したとき、若山城(和歌山城)が秀長に与えられたが、秀長は重晴を城代(3万石)としている。慶長元年(1596)に出家して宗栄と号した。

なお重晴は千利休から茶を学び、茶人としても有名であった。

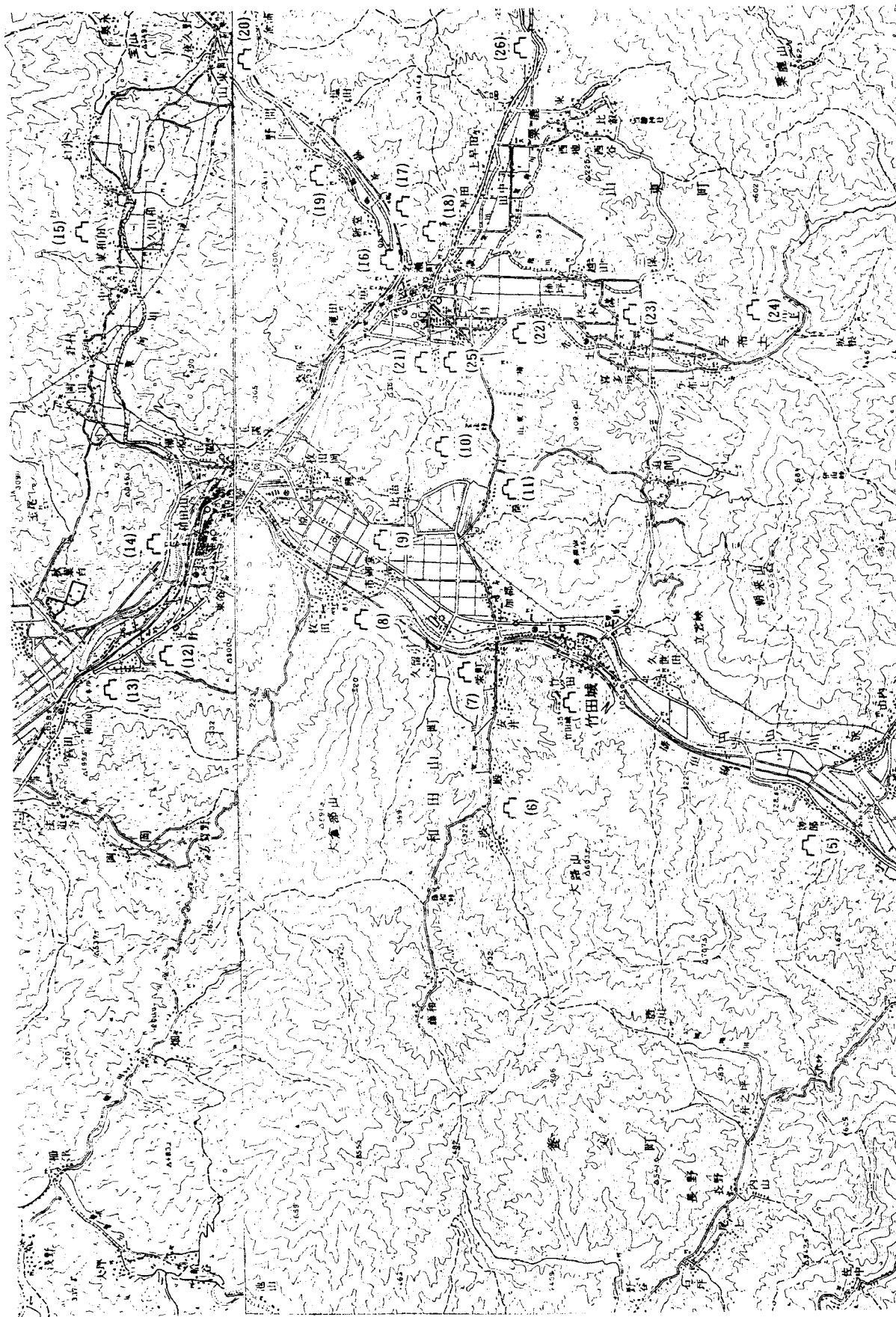
《参考》赤松広秀[広英・広通](永禄5年~慶長5年[1562~1600])

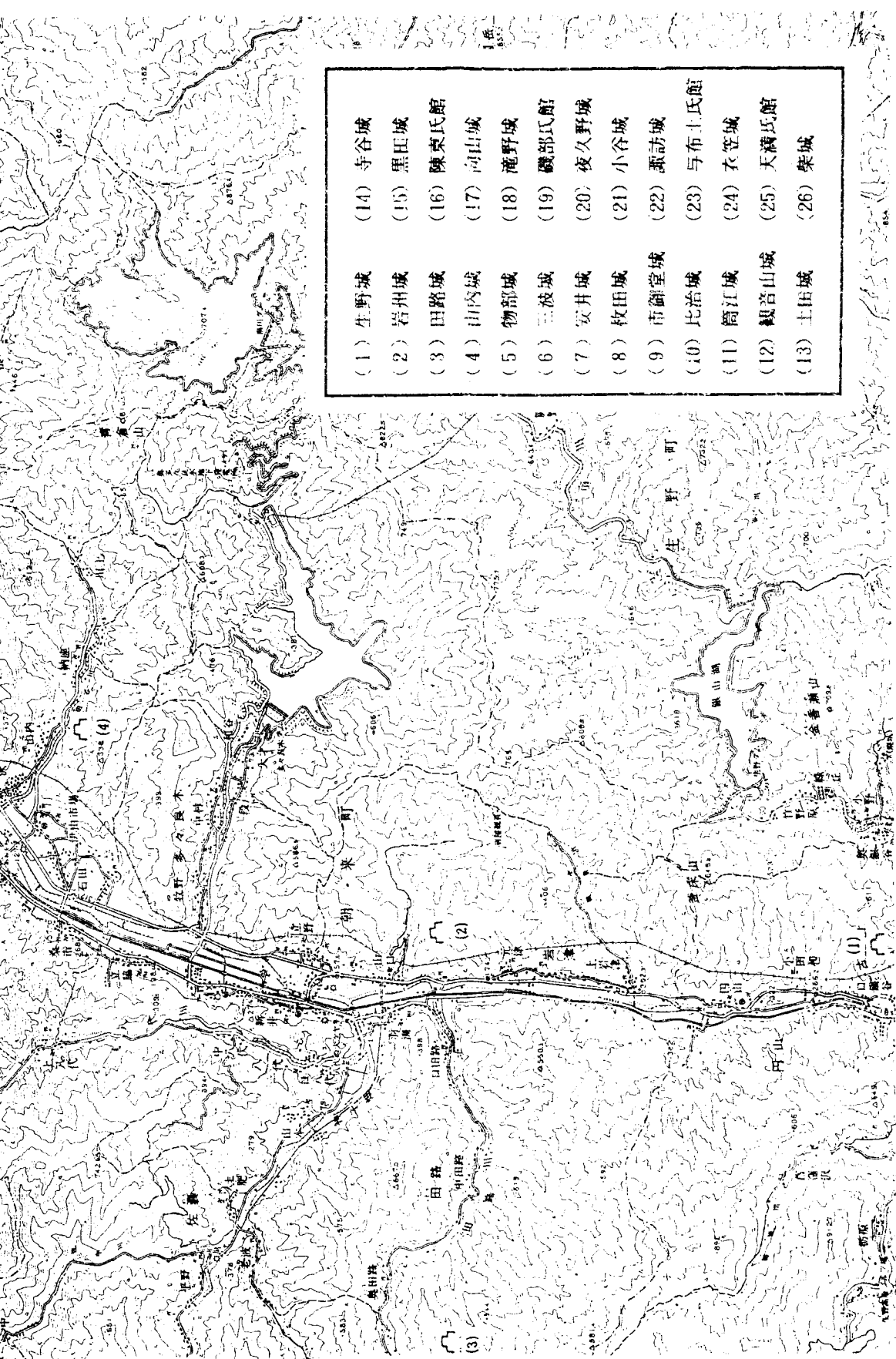
戦国末期・安土桃山時代の武将。龍野城赤松氏の3代城主(一説に4代城主)で、後に竹田城最後の城主となった。はじめ孫二郎広秀、弥三郎広英と名乗ったが、のち斎村(いむら)左兵衛、赤松広通と称している。

天正3年(1575)10月に上洛して織田信長によしみを通じたのは、弥三郎広貞であったが、天正5年(1577)12月に羽柴秀吉が播磨を制圧したとき、龍野城を出て平位荘佐江に退去謹慎したのは弥三郎広英であった。広貞と広英の花押は異なっており、両弥三郎は別人とみられ、一説には兄弟ともいう。

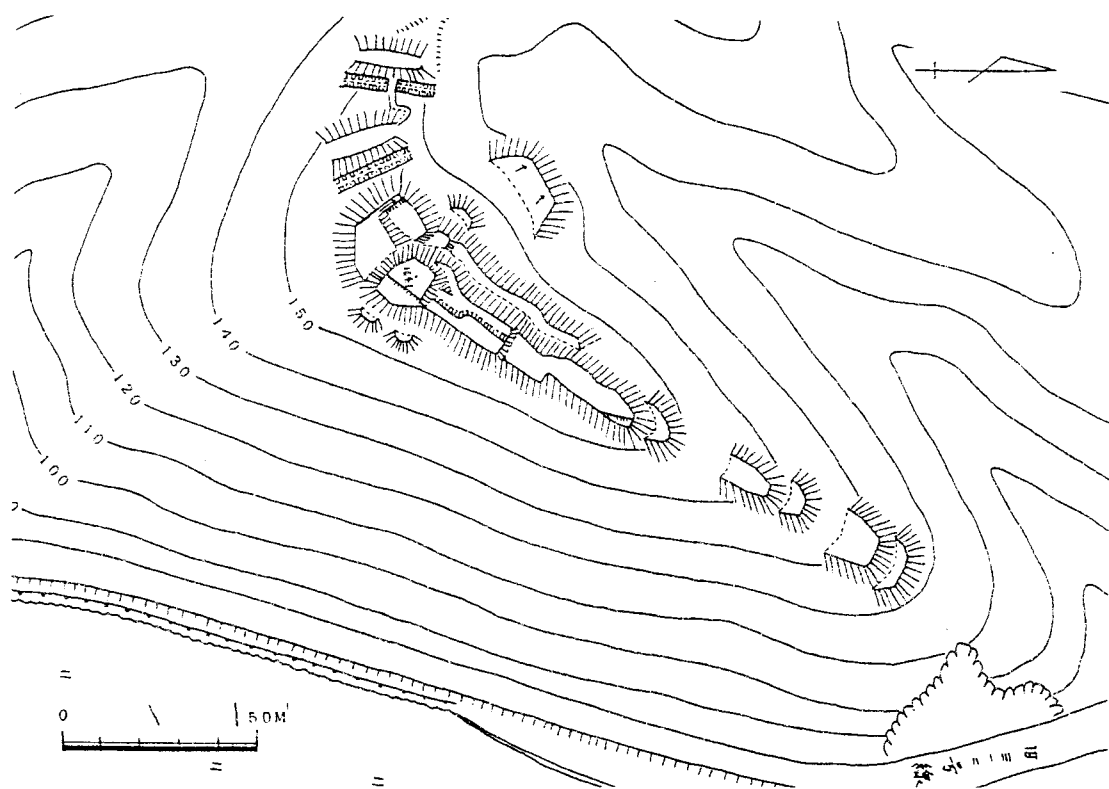
天正10年(1582)、秀吉の備前・備中への侵攻の先鋒蜂須賀正勝軍に先陣として秀吉軍に加わり、以後、山崎の合戦・賤ヶ岳の戦いなど諸戦に参陣したという。

天正13年(1585)に天下統一を果たし関白の地位についた豊臣秀吉は、支配体制の強化を図って大名の配置換えを行なった。但馬では出石城に前野長康が入り、豊岡城に明石則実、八木城に別所重棟が入った。そして竹田城には赤松政秀が朝来郡22000石を賜り、播磨から移封された(『武功夜話』)。以後15年間、広秀は竹田城最後の城主となる。

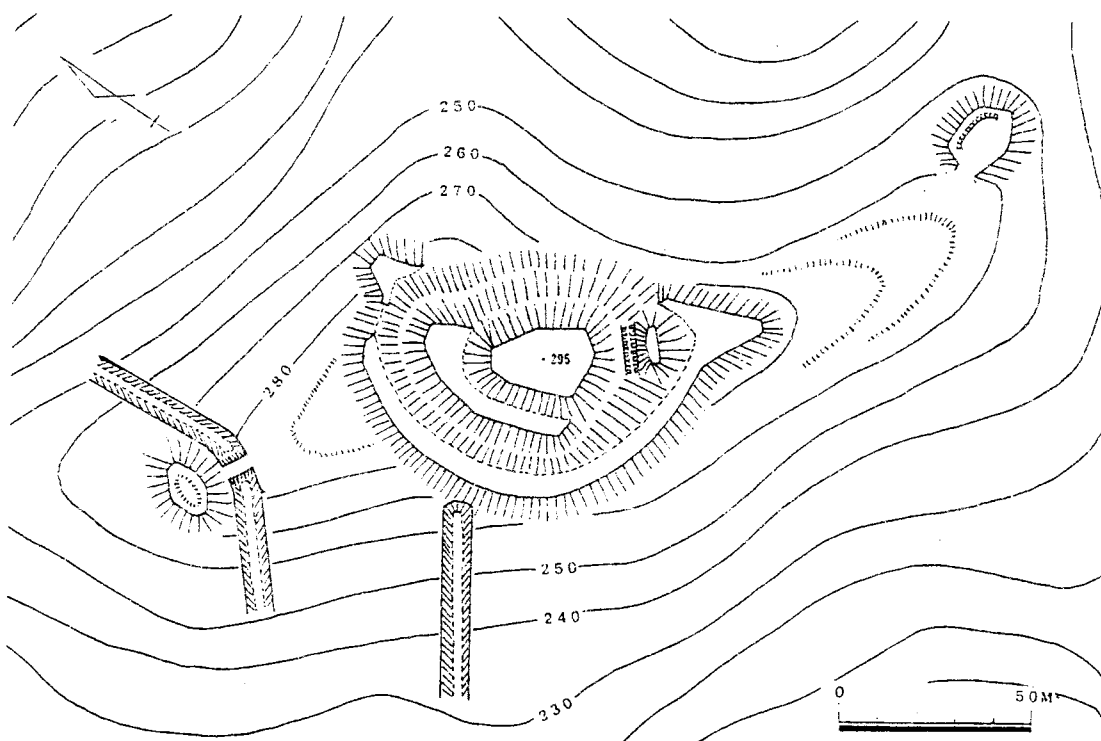




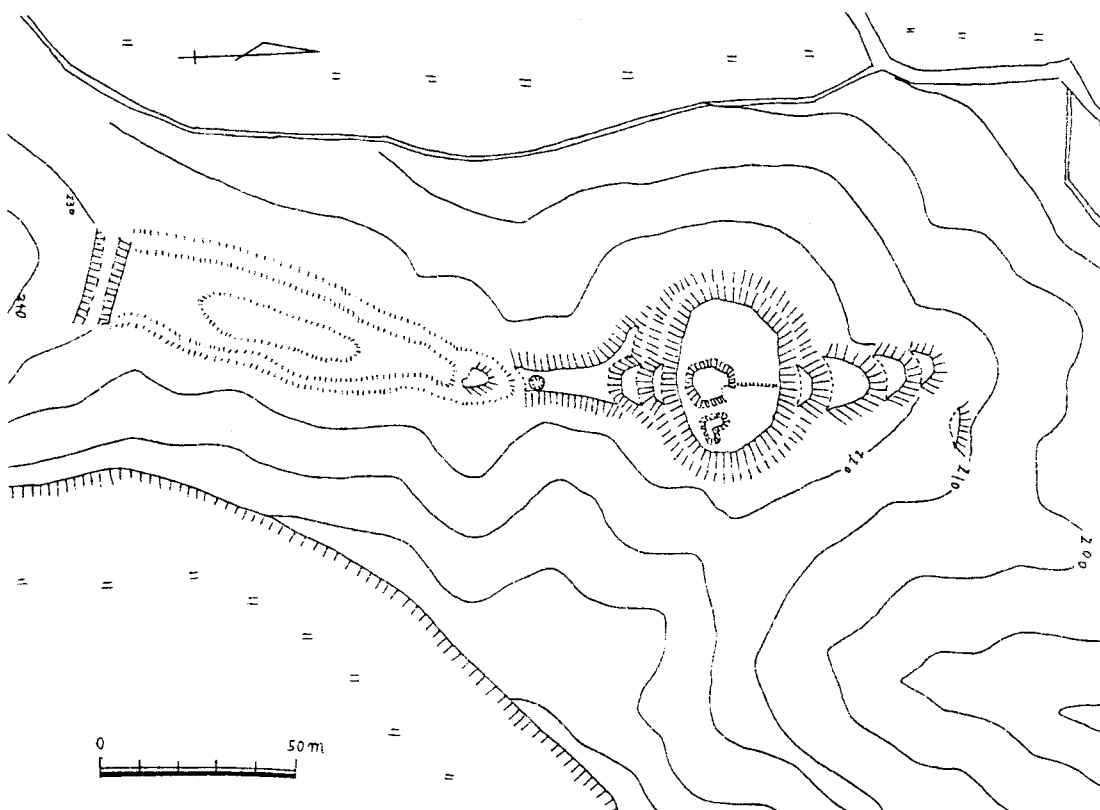
竹田城周辺の中世城部分布図



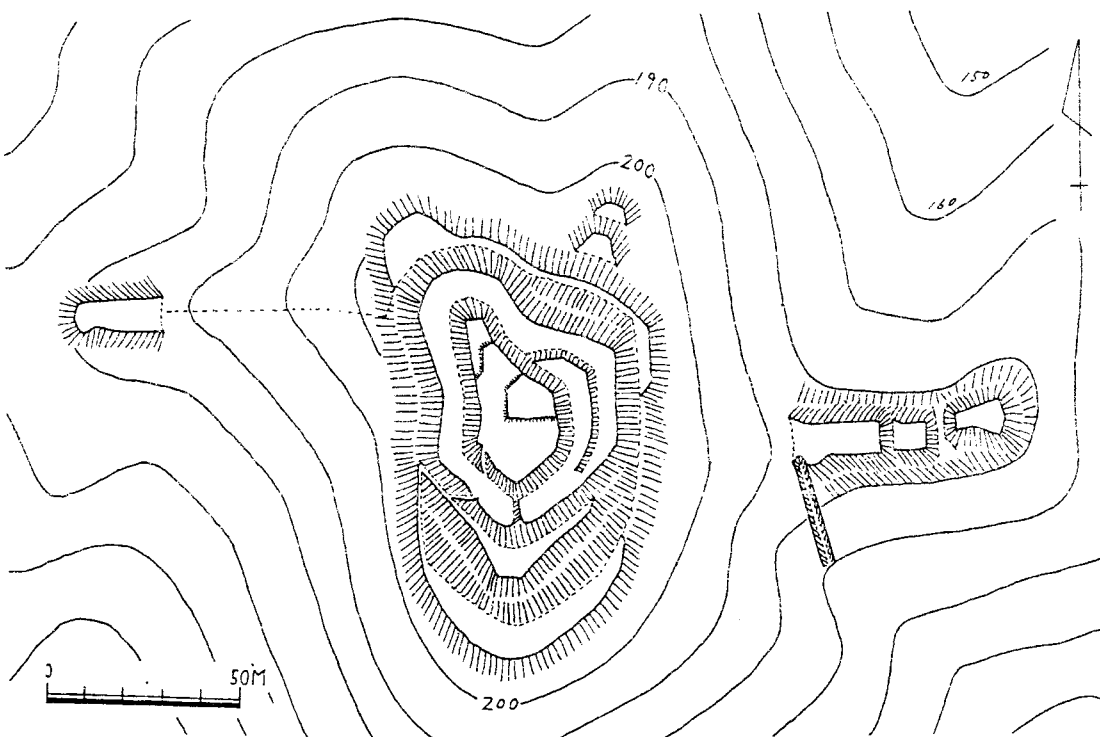
和田山町枚田城縄張り図 1 / 2000



和田山町比治城縄張り図 1 / 2000



和田山町三波城縄張り図 1 / 2000



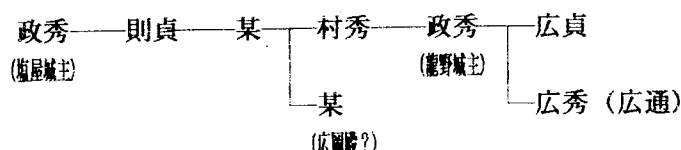
和田山町安井城縄張り図 1 / 2000

現在の竹田城の遺構のほとんどは広秀の時代のものと考えられる。

天正18年(1590)、西国を征した秀吉は小田原の北条氏を攻め、広秀は前野長康に従って伊豆韮山攻撃軍に加わった(『武功夜話』)。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは西軍に与(くみ)して丹後田辺城の細川藤孝(幽斎)を攻めたが、西軍の敗戦の報を聞くと、友人亀井茲矩(ねり)に誘われて因幡鳥取城を攻めた。ところが、この時鳥取城下に放火した責任を茲矩に押しつけられて、同年10月28日鳥取真教寺で自刃した。享年39歳。

広秀はまた、龍野景雲寺の藤原惺窩(ふじらせいゐ、舜首座)の弟子であり、同時に保護者でもあって終生好学勤勉であった。慶長の役によって日本に抑留された朝鮮の朱子学者姜沆(カン)は『看羊録』の中で、日本の将兵はことごとく盗賊だが、広通一人礼節がある、と激賞した。広通の死を聞いた藤原惺窩は「悼赤松氏三十首」を詠んで哀傷した。広秀は竹田でも仁君と慕われ、現在でも虎臥(にが)大明神として祀られている。

龍野赤松氏系図



和田山町歴史館(兵庫県朝来郡和田山町寺内)

糸井京極陣屋跡に建設されている。鉄筋コンクリート平屋建て、高床式の建物で昭和52年(1977)11月開館。和田山町歴史館は厳密にいうと、民俗資料を中心に展示してある「歴史民俗資料館」、考古資料中心に展示されている「郷土文化財館」および池田古墳を縮小復元した「古墳園」に分かれている。

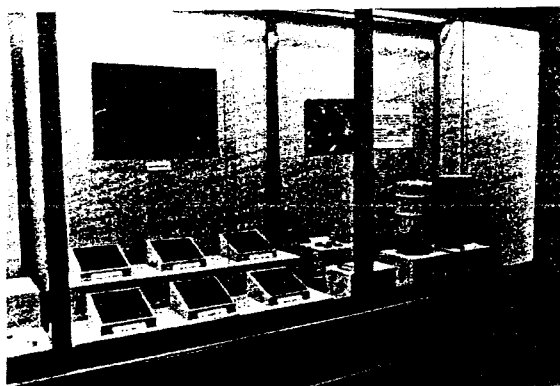
そのうち郷土文化財館は、縄文時代から古墳時代における町内からの出土遺物を収蔵・展示しているが、とくに古墳時代の遺物に見るべきものが多い。

城の山(じょうのやま)古墳出土の銅鏡6面(三角縁神獣鏡3面、四獣鏡・唐草文帯重圈文鏡・方格規矩八禽鏡各1面)、刀剣・石製品・玉類などは貴重なものとして注目されており、一括して国の重要文化財に指定されている。

また金銅頭椎(かぶつち)太刀、春日古墳出土遺物(馬具・金銅装太刀他)、銅鏡の3件は県指定の重要文化財である。

その他、土器、石器、装身具、但馬最大の前方後円墳である池田古墳出土の埴輪など、貴重な資料が多数展示されている。

また特別展も隔年ごとに開催され、広く町民に資料の公開と研究の機会を与えている。



和田山町立郷土文化財館 / 展示室

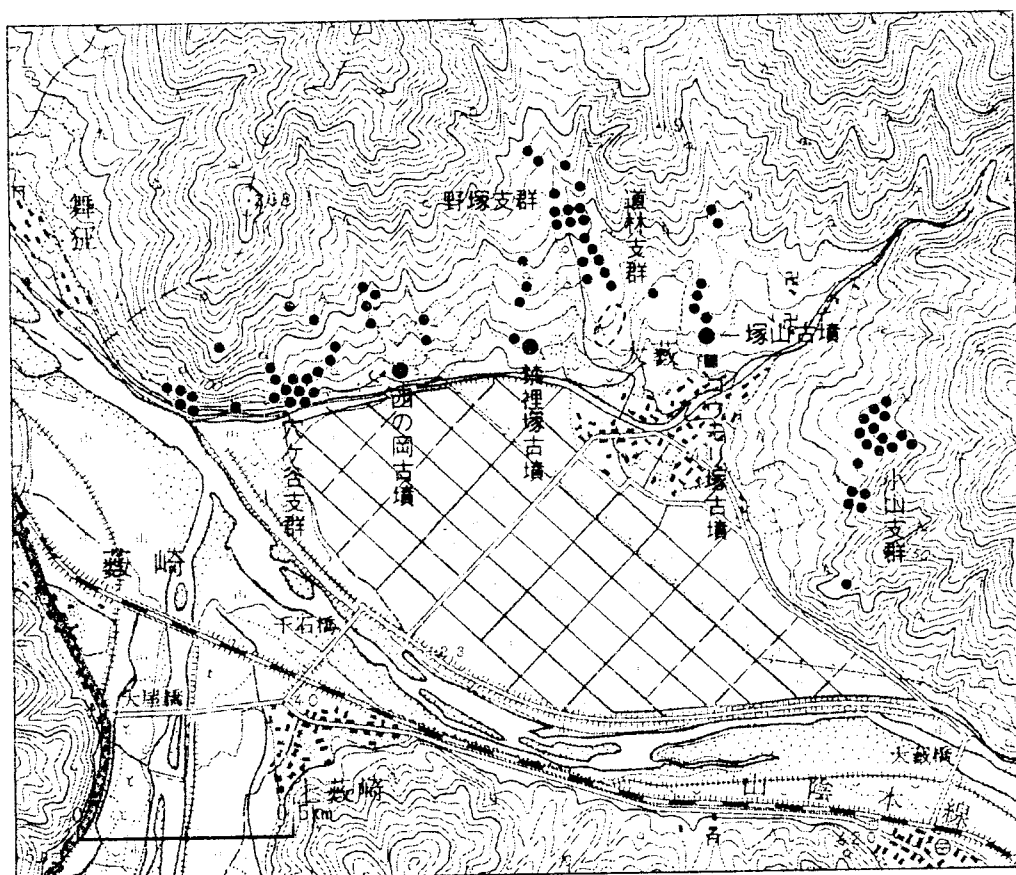
大藪古墳群 (兵庫県養父郡養父町大藪)

但馬最大規模の後期群集墳。東西1200m、南北700mあまりの範囲に約100基の主に古墳時代後期の古墳が群集している。

内部構造がわかっているものはすべて横穴式石室で、四つの小支群で構成されている。東から順に「小山支群」「道林支群」「野塚支群」「穴ヶ谷支群」からなり、これらの支群の間にも散在的に数基の群がある。未調査だが、これらの支群のうち道林支群には石材の露出がいっさい認められないため、横穴式石室墳に先行する（竪穴式石室をもつ前・中期の）古墳群である可能性が高い。

また、東より塚山古墳・コウモリ塚古墳・禁裡塚古墳・西の塚古墳の4基は横穴式石室の全長が11.2m～13.6mであり、但馬最大級である。さらに禁裡塚古墳の石室には赤色顔料の塗布、墳丘からは装飾付須恵器の小像が採集されており、本墳がこの地域の首長墓であることを示唆している。

石室規模などから考えて、大藪古墳群が、後期に円山川中上流域を掌握していた豪族たちの一大墳墓群であったことは疑いがない。



大藪古墳群群集状況 (『日本の古代遺跡2 兵庫北部』より)

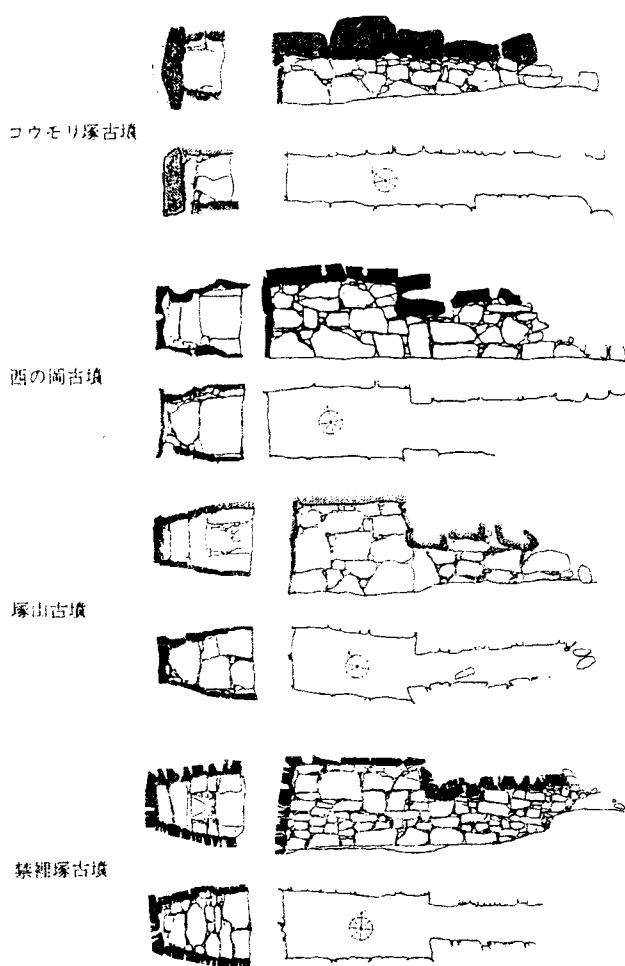
コウモリ塚古墳と塚山古墳

大藪の集落を抜けたその外れに、わずかな田畑の中に少しこんもりとしたところがある。これがコウモリ塚古墳である。墳丘は大きく後世の改変を受けており、確実なことは不明だが、長辺28m、短辺23m余りの方墳と考えられる。

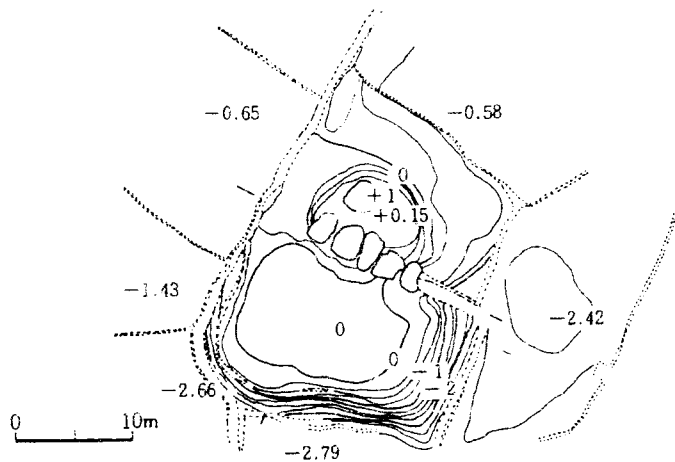
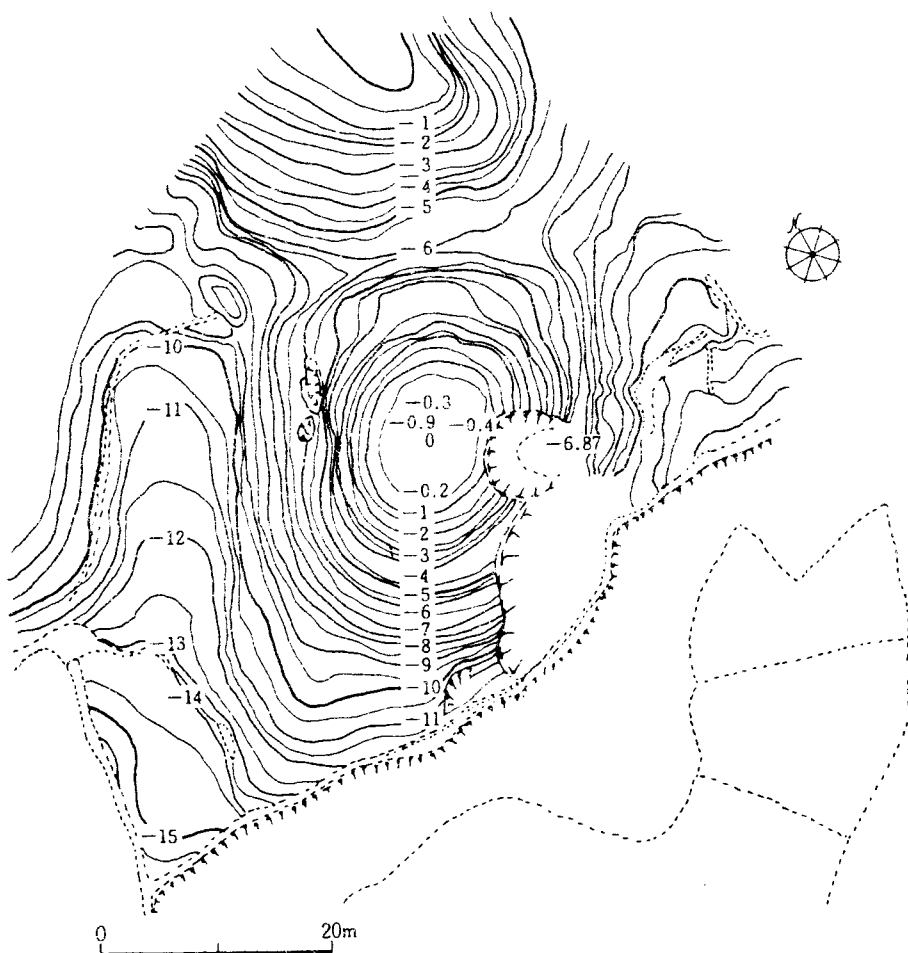
ほぼ中央に南南東に開口する横穴式石室が造られている。少なくとも全長12.4m、うち玄室長7.1m、羨道長5.3mというように玄室が大きいことが特徴である。

このコウモリ塚古墳からわずか20、30m左手に見える山の斜面に塚山古墳がある。塚山古墳は南西に伸びてくる小さな尾根支脈に立地しており、石室はこれと直角となるように造られている。そのために横穴式石室はやや南西面に押し込まれた状態になっており、とくに羨道部の歪みが気になる。これは墳丘の土も含め、山全体が少しずつ平地の方へ押されて動いているためと思われる。

塚山古墳は墳丘の基底線をどこに求めるかによっても異なるが、東西径24m、南北径30m、高さ8mの円墳のようにも見える。しかし、実測図で観点を変えてみると、南北46mほどの方墳と見ることも可能で、決着がついていない。



大藪古墳群主要古墳の横穴式石室の比較



塚山古墳(上)とコウモリ塚(下)古墳墳丘実測図

出石城下町

この町の地名は、古くは『日本書記』の垂仁天皇3年（B. C. 27）の条の【天日槍（あめのひやり）】の説話に関連して＜出嶋（いずし）＞とあるのが、現在の出石の地で有ろうと思われている。

中世に至っては、西国に威を張った「守護大名・山名氏」が出石神社の北に「此隅城（このすみしろ）」を築いて、山名氏の本城とした。山名氏没落の後、小出氏→仙石氏の統治の時代を経て明治維新を迎え現在に至っている。

出石の街は、出石川に沿った静かな山間に『但馬の小京都』と呼ばれる町並みがある。反面、鉄道敷設を辞退して、その繁栄を豊岡にゆずっている。

町は、有子山の北麓に位置して、要所に寺院を配した規則正しい町並みを今に伝えている。

残念なことに、明治9年（1876）の大火で町並みの大半を焼失しているが「仙石屋敷」や、「辰鼓櫓（しんこ）」町の外側に配置された「足軽屋敷」が焼け残り江戸時代の面影を留めている。

町中の見所としては、【出石神社】【出石町史料館】【宗鏡寺（沢庵寺）】【出石城跡・家老屋敷】午前8時に、登城を知らせる時を知らせた【辰鼓櫓】がある。

工芸品としては白い肌合いの【出石焼】【但馬ちりめん】、食べ物としては【出石そば】がある。

< 参考 >

☆なお出石藩の小出氏以降の歴代藩主と知行高を以下に示してご参考に供する

入部年	藩主	知行高
1595年	小出 吉政	6万石
1604	小出 吉英（よしふさ）	5 "
1613	小出 吉親	2. 9 7
1619	小出 吉英（再封）→吉重→英安（ふさやす）→英益→英長（ふさなが）→英及（ふさのぶ）で断絶。	5
1697	松平 忠周	4. 8
1706	仙石 政明→政房→政辰→久行→久道→政美→久利	

山名氏（やまなし）

山名氏は、新田義重の子・義範が、上野国多胡郡山名郷（群馬県高崎市）に於いて山名三郎と称したのに始まる。

新田氏の庶流でありながら、山名時氏（やまなしときひ、1303-1371）が南北朝の内乱では足利尊氏に従い活躍、伯耆守護となり、山陰におけるあしがかりを築いていった。そののち更に勢力を伸ばし5か国の守護職に就いている。

さらに、一族で11か国の守護を兼帯して、世に山名氏をして＜六分一殿（はちのふのいちのりょうだい）＞と呼ばれる守護大名になってゆく。

また室町幕府の四職家老の一つとして幕政にも重きをなしていった。

この山名氏の強大化を、将軍・足利義満は畏れて山名一族の内紛を利用し山名氏清らを挑発して『明德の乱』を起こさせ勢力を削ぐ画策をする。

この騒乱で山名氏は、山城・丹波・丹後・和泉・紀伊・美作・出雲・隠岐の守護職を失い、但馬・因幡・伯耆の守護職を確保するに留まる大打撃を受けた。

その後、氏清の甥の「山名時熙（やまなしときひろ）」が勢力挽回に務め、足利義持・義教の信任を得、御相伴衆として再び幕府政治の中樞に深く参画するに至る。

時熙の子「山名持豊（宗全）」の時、『嘉吉の乱』での戦功で、播磨・美作・備前の守護職を得て再び勢力を回復する契機を掴んでいる。

その後、将軍継嗣問題、官領家の斯波（しば）・畠山氏の家督をめぐる内紛などがからまり、細川勝元と対立「応仁・文明の乱」を引き起こし、持豊（宗全）は西軍の将として十余年にわたり京都を舞台に戦う。

この戦乱は持豊（宗全）の死後、家督を継いだ「山名政豊」が、細川政元と講話を結び、戦乱を終結させた。

戦乱後は但馬に下って、支配下の因幡・伯耆で反乱が相次いだため、出兵、これを平定する。しかし、反乱は本国の但馬にも及び、このごたごたを契機に山名氏は没落の一端を辿り、但馬の実質的な支配権は地元の有力国人衆（八木氏・太田垣氏・垣屋氏・田結庄氏等）の手に握られて急速に勢力を失った。

<時代を代表する山名氏>

【山名時義（やまなしときよし）】貞和4年（1348）～康応元年（1389）

室町時代初期の武将で、山名時氏の五男として生まれる。幼少のときは時氏の長男・師義に子がなく、師義（もろよし）の嗣子となって養育されている。

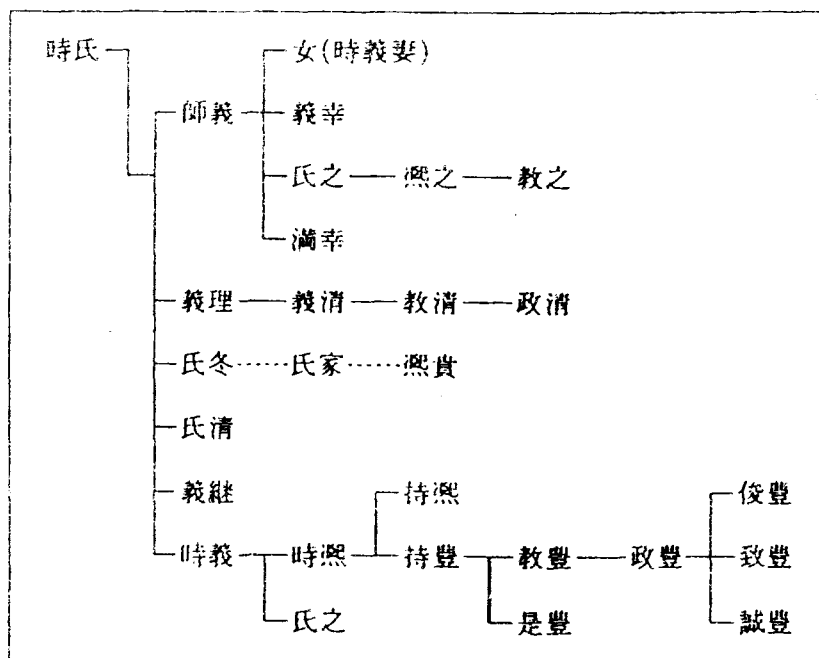
その後、師義に嫡子・義幸、満幸らが生まれたが、永和2年（1376）師義が没したあと、山名家の総領職を継承し、父・時氏から譲られた美作、時氏没後に得た伯耆、但馬の守護職が譲られた。

康暦元年（1379）將軍・足利義満の追討を受けた京極高秀事件で戦功が有り、新たに「備後」「隠岐」の守護となり、併せて5か国の守護となった。

この時代に、「美作」が、兄・義理（よしまさ、祇・3男）の分国となり「紀伊」の2か国の守護、兄・氏清（祇・3男）の「丹波」「和泉」「山城」、山名満幸の「丹後」「出雲」、山名氏家の「因幡」などの守護職の大半を山名一族で握り、一大勢力を築いて行く。

時義の晩年に、嫡流を自認する「満幸」、さらには弟の下に立つことを嫌った「氏清」との間に総領職をめぐり内紛の兆しが発生、時義の没後に【明德の乱】となって表面化、「満幸・氏清連合軍」の敗退で騒乱は終了するが、山名一族の勢力は「但馬」「伯耆」「因幡」を除き、守護職のほとんどを失っている。

山名氏系図



【山名時熙（やまなときひろ）】貞治6年（1367）～永享7年（1435）

山名時義の長男として生まれる。康応元年（1389）父・時義が死去したあと山名氏の総領職を譲られた。

しかし、この相続に関連、時義存命の時から山名時氏の嫡孫を自認している、師義（もろよし）の子「山名満幸」との間で総領職をめぐり家督争いが起きる。

後の「明德の乱」の芽生えである。

將軍、足利義満は、時熙に上洛を命じ、幕府への出仕を促したが、喪中であること、領国内の動揺（家督争い）を恐れてこれを辞退した。

この辞退を義満は怒り（山名勢力の分断の意図も働く）、氏清と満幸に対して「時熙・氏之」追討を命じている。この時、時熙は備後に逃れて降伏する。この騒ぎで、義満は領国であった但馬を氏清に、備後を細川頼之に与えている。

そののち上洛して赦免を願いでて、許されている。「明德の乱」で領国の大半を失うが、応永6年(1399)大内義弘が起こした「応永の乱」での戦功で、備後安芸を手にいれ、失った領国を除々に回復して行く。時熙は、在京し將軍・義持、義教に重んじられ御相伴衆として幕政に参画してゆく。永享4年(1432)には侍所頭人となり、翌年には、不穏な動きのあった仁木氏の「伊賀」を与えられている。

永享5年(1393)家督を次男の「山名持豊」に譲った。しかし家督譲渡後も幕閣の中樞にあって活躍、永享7年(1435)に没している。

【山名持豊(宗全) (やまな・もちとよ(そうぜん))】 応永11年(1404)~文明5年(1473)

兄・持熙が幕府への出仕を怠り將軍義教のけん責をうけたため、時熙は持熙を廃嫡し、家督を「次男・持豊」に譲り、但馬・安芸・備後・伊賀の守護を兼帯することを、將軍・義教から承認される。

家督を継ぎ、父・時熙が1435年に没したあとは、事実上・山名氏の総領となった持豊は、翌年「但馬一宮・(斷絶)」に天下泰平・國中豊穰を祈念しているが、そこには、『自分は祖父重代の蹤跡(しょうせき)を継ぎ、親族数輩の首領となったが、神明の加護をたのんで、総領を全うする』との強い決意表明がなされている。

父・時熙没後の三周忌の終わった直後の永享9年、兄・持熙が家督相続をめぐる備後で反乱を起こしたが、これを鎮圧して山名氏における一族の統括権を確立した。

以後、幕政に参画、永享12年、侍所頭人に任ぜられている。

敬白
家督上個明一宗全大明神主
石高家久任高國守護職上業
二門業權後祥景代念功述傳三
持豊元永承陸父祖重代跡跡備知
謀政策首領是則所の
神明神蹟今世不承孫宗全
敬唯且春祈穀新念天下泰平國中
豐穰也者陳社備神事小傳助所
無懈即礼頌不違是作此書

山名持豊願文

翌・嘉吉元年(1441)足利義教が赤松満佑に暗殺された「嘉吉の乱」での戦功で「播磨」「美作」「備前」の守護職を加えて、一族の分国は8か国に及び、「明德の乱」で失った勢力を回復していった。「嘉吉の乱」の後は幕府の実力者一人となる。

宝徳2年(1450)家督を嫡男「教豊」に譲与して、自らは剃髪して宗峯(そへう)となるが、やがて法号を『宗全』と改める。

やがて【応仁の乱】が始まり、西軍の将として細川勝元と対立して守護大名の勢力を二分した戦闘を繰り広げる。

しかし勢力は伯仲して、戦局は膠着状態が続き、厭戦気分の強まった文明5年(1473)に、波乱の一生を終えた。

☆出石藩主、小出氏

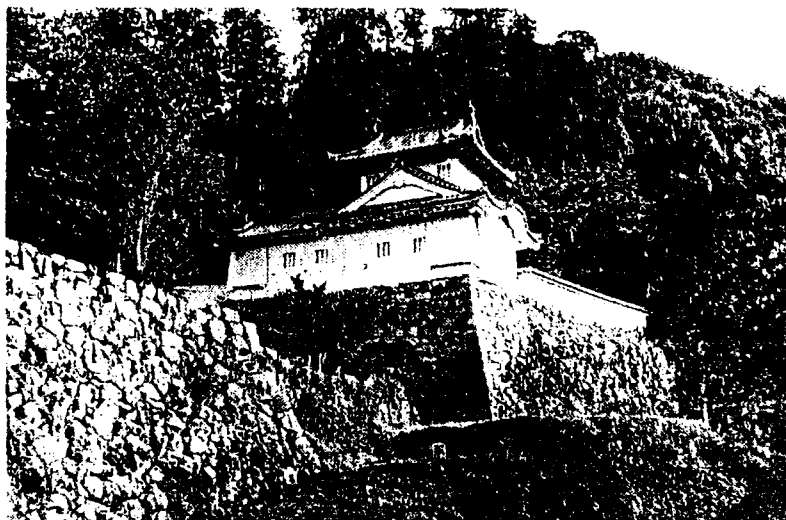
小出氏は、尾張国中村の出身で、小出秀政が秀吉の母の妹を妻としていたことから秀吉恩顧の大名として発展、天正13年（1585）岸和田城主に就任した。

その子の「吉政」が播磨竜野から、出石藩主となったが、父の秀政没後、吉政が岸和田藩主になり、出石藩主は、吉政の長男・吉英（よしひさ）が出石藩主となった。

慶長18年（1613）吉政が没したあと、「吉英」が出石から岸和田藩主に転じ、出石藩主は弟の吉親（よしちか）に継がせるが、この時出石から22,497石が割かれて岸和田領とされ、吉英の岸和田における所領は、父・吉政の遺領とあわせて5万石の藩主となっている。

大阪の陣の後、吉英は再び出石へ戻され、吉親は園部へ移される。

「二度目の出石藩主」の時代に吉英が『出石城』を築き、領内検地も実施している。



出石城本丸跡

☆出石藩主、仙石氏

このように、岸和田藩と出石藩は、本・支藩的關係の形で小出氏によって受け継がれるが、宝永3年（1706）仙石氏の入封でこの関係はおわり、出石は「仙石氏」により7代にわたって出石藩主が続けられた。

なお、仙石氏統治の時代に、後継者の問題で「仙石騒動」が発生、58,000石から3万石に減封される事件が起きていることを付記しておく。

仙石時代の歴代藩主名については、別表を参照されたい。

< 参考 >

出石町史料館 (出石郡出石町宵田)

出石町立の歴史史料館である。但馬出石藩主・仙石氏ゆかりの資料・千数百点が展示されている。地方文化振興の目的と年々増加する観光客の要望にこたえる形で、町所蔵の資料を中心に昭和52年(1977)に開館した。

主要な展示品としては、文化12年(1815)から明治4年にわたる藩政執務日記としての『出石藩御用部屋日記』、藩校・弘道館・講師、桜井良蔵(東門)が文化年間から嘉永年間(1861→62)にかけて記した『東門日記』をはじめ多数の近世資料が有る。

その他に、藩祖・仙石権兵衛秀久、6代目・仙石政辰着用の甲冑も展示されている。

建物は、明治20年代に建てられた木造2階建てと、数寄屋風の優雅な民家及び別棟のセイロ蔵(生糸倉庫)を改装したものである。



出石町史料館 / 藩祖仙石権兵衛秀久着用の甲冑

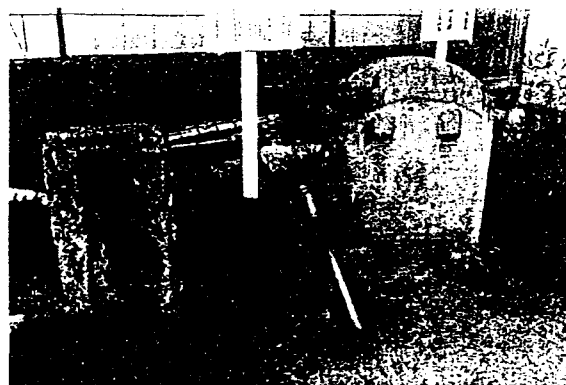
出石町所在長持形石棺 (いずしちょうしよざい・ながもちがたせつがん)

出石町内に、珍しい「長持形石棺」3箇が存在する。長持形石棺には、しばしばその地域の代表的な首長墓から発見されており、この石材が播磨の竜山石と想定されることがともに極めて興味深い存在で、古墳の特定・出土遺物の実体究明の待たれるところである。

石棺は、出石町教育委員会前庭と本覚寺境内の二か所に分散・保存されているが、元は同一の長持形石棺を構成していたものと思われる。

教育委員会前庭には、かつて出石城跡に放置されていた木口部分が立てられている。その外面には2箇の方形の突起がついており、中央付近には赤色顔料の付着がみられる。

本来、石棺は木口部および長側板が、それぞれ2枚、それに蓋と底石で構成されるが、この石棺は、木口部分・1枚、蓋が2片発見されるにとどまっている。



出石町所在長持形石棺 部分



出石城下町 / 家老屋敷



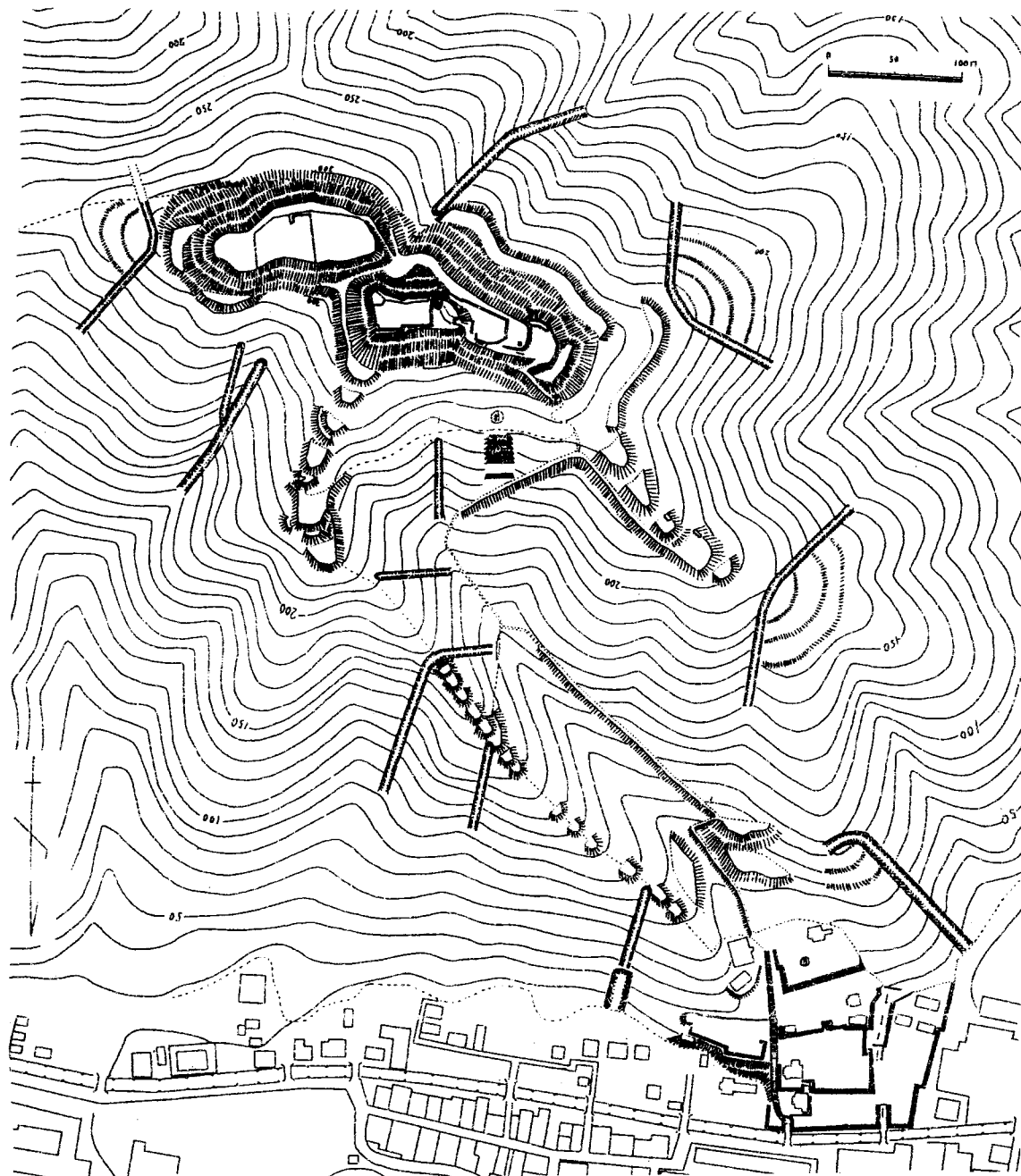
出石城下町 / 辰鼓櫓

有子山城（ありこやまじょう）

出石町内町の出石城背後の城山（有子山）に築かれた山城。

永禄12年（1569）、此隅山城が落城したあと、山名祐豊（けいひ）が山名氏の勢力を再結集し、天正2年（1574）頃、築城した新城である。しかし、羽柴秀長の2次にわたる但馬攻め（天正5年・8年〔1577・1580〕）によって、名門山名氏はこの城とともについに滅亡した。

なお、山麓にある現出石城は慶長9年（1604）小出吉英によって築かれたものである。



有子山城縄張り図

宗鏡寺（すきょうじ） 臨済宗大徳寺派、山号・円覚山。

この寺は、一般的には「沢庵寺」として知られている。

この寺の開創年代は定かでないが、寺伝によると、明徳2年（1391）の「明徳の乱」の後、山名時熙（ときひろ）が一族の菩提を弔うために建立したと伝えられている。

一説によれば、応安元年（1368）、明徳の乱で敗れた山名氏清（うきよ）により創建されたと伝えられている。その根拠として、氏清の法号が「宗鏡殿」であるところから氏清の創建ともいわれている。

寺は、山名氏歴代の帰依をうけて繁栄したが、天正8年（1580）秀吉の但馬征伐後は山名氏が没落して、この寺も荒廃していった。

この荒廃した「宗鏡寺」を再興したのが出石出身の「沢庵和尚」である。

沢庵和尚は、天正元年（1573）山名氏の重臣・秋庭綱典（つなり）の次男として生まれ、10歳で唱念寺にはいり出家、14歳で宗鏡寺の塔頭勝福寺で禅僧としての第一歩を踏み出している。爾来、京都・佐和山・和泉の堺・岸和田で修業する。元和6年（1620）小出吉英（よしひさ）が岸和田から出石城主への転封に従って、出石へもどり、吉英に宗鏡寺復興をすすめて許され、「沢庵和尚」が中興開山として力をつくした。

復興後、沢庵和尚は、この寺の一角に『投渢軒（とうもんげん）』を建立して隠栖の所となし修業にあたっている。その他に『宗鏡寺庭園（兵庫県指定の文化財）』があり、沢庵の手作りと伝えられているが、その根拠は無い。

現在は『本堂』『開山堂』『鐘楼門』などがあるので、山名氏一族、沢庵和尚をしのびつつ観賞されることをお勧めする。



宗 鏡 寺

出石神社（兵庫県出石郡出石町宮内）

但馬国一宮であるところから、地元では「いっきゅうさん」の呼び名で呼ばれている。

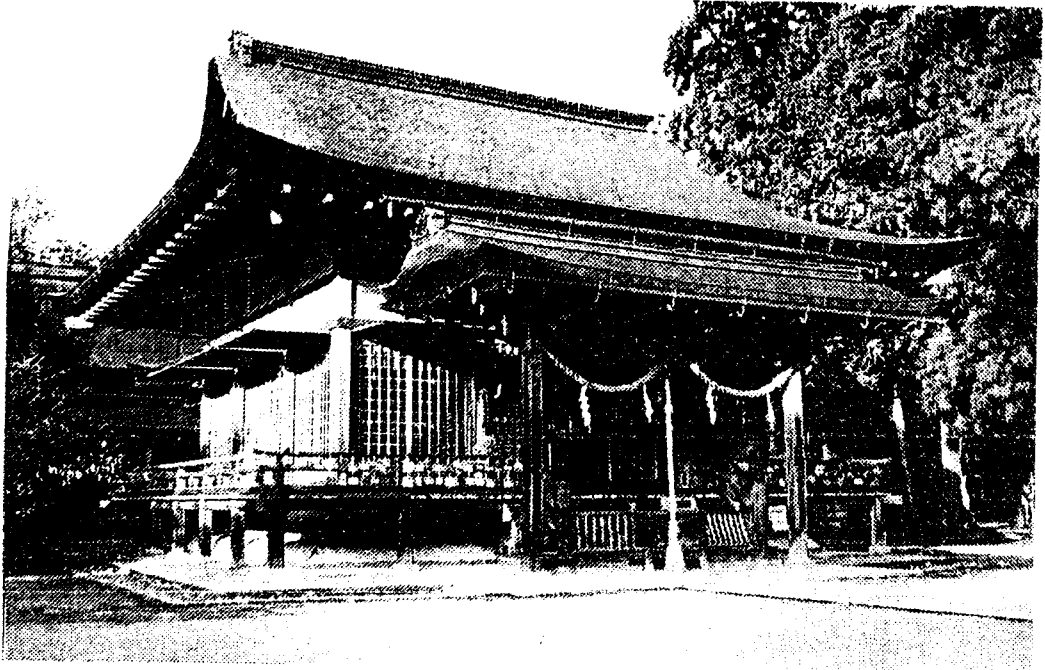
神社の祭神は、この但馬を開いたと言われる【天日槍（あめのひこ）】と、【八種神宝（やくさのかんだら）】を伊豆志八前の大神（いずしまえのおおかみ）として祭っている。

【天日槍】は、新羅（しらぎ）の王子で、「記紀」によると、垂仁天皇の時代に日本に渡来して筑紫・播磨・淡路・近江・若狭を経て但馬の出石にとどまる。

この時代、但馬、豊岡は一面の泥海であったが、天日槍は大地を切り開いて水を日本海へ流して、豊岡や出石の盆地が出来たと伝えられる。

このため、天日槍は、現在でも但馬開発の神としてあがめられている。

神社の宝物として「国光作の脇差し」が国の重文に指定されている。



出石神社

出石町宮内、出石神社の東、此隅山にある山城。別名、小壺城(にけがう)とも呼ばれる。山名時義が総領職を継いだ際、但馬の本拠・山名総領家の本城として築いたという。以後、永禄12年(1569)、秀吉に攻略され、落城するまで山名時豊(宗全)を代表とする山名宗家7代の名目上の居城となった。縄張りは、すべての尾根に曲輪を造る、放射状連郭式の曲輪配置をしている。こういう配置は守護大名や国人クラスの城に多く見られる。縄張りは

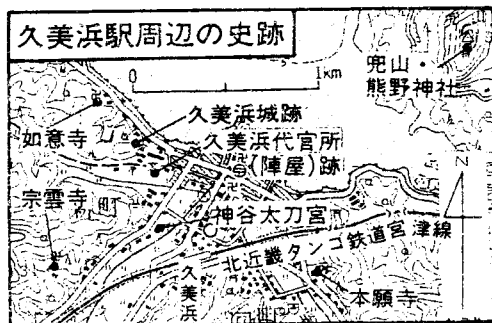
- ①は南北朝期～室町期に山名氏が築いた部分に対応し、②は永禄12年(1569)の落城以後、織豊政権によって大改修された部分に対応すると考えられている。



神谷神社〔かんだにじんじや〕

熊野郡久美浜町久美浜にあり、太刀宮とも呼んでいる。祭神は八千矛神、丹波道主命である。もともとは神谷神社と太刀宮は別社で、延喜式内社の神谷神社は現在地の南西の神谷地区にあり、戦乱の世に荒廃したので当地の太刀宮に合祀されたという。両社ともに垂仁天皇の時代に四道將軍丹波道主命によって創祀されたと伝え、道主命が太刀宮に納めたという国見剣が神霊として祀られている。例祭は10月17日である。

府指定文化財の本殿は1,781年〔天明元年〕に建てられ、桁行二間、梁行二間、入母屋造で、出雲地方の大社造に通じる構成である。また尾垂木付きの三手先組物で軒をにぎやかに造り、向拝柱上は連三斗を三段に組んで桁を受ける、当地方独特の手法を用いている。



久美浜県

1,666年〔寛文6年〕宮津京極氏改易後、この地方は幕府領と大名領が入り交じるようになり、幕府は丹後における幕府領を支配するために代官所をおいた。当初は生野、大津、京都などと各地を転々としているが、1,735年〔享保20年〕熊野郡湊宮に久美浜陣屋がつくられ、これが明治維新まで続いて1,868年〔慶応四年〕に久美浜県となったものである。その後久美浜県は廃藩置県で豊岡県となり1,870年に京都府に合併された。



旧久美浜県庁舎(久美浜陣屋)

旧久美浜県庁舎

神谷神社境内に、久美浜県庁舎の玄関棟が移築保存されている。この庁舎は明治二年に久美浜代官所跡地に着工し翌年に完成したが、もともとは執務、応接、知事住居がL字型につなが構成であった。久美浜県が豊岡県に合併した時点でこの庁舎は豊岡に移され、残った玄関棟が大正12年に同地に移築されたものである。

明治初期の建造物としては府内最古のもので、玄関棟は府指定文化財、境内は府の文化財環境保全地区になっている。

如意寺〔によいじ〕

熊野郡久美浜町西本町にある。高野山真言宗で山号は宝珠山と称し、天平年間〔729～749年〕に行基が開山した。本尊は十一面観音である。伝承によれば、行基が護持していた如意宝珠を埋めて寺を建て証として杉を植えたとする。また一説によれば、行基が宝珠山より海に入る火を見て、海中より仏舍利を得てこれを埋めたという。

1,295年〔永仁三年〕伏見天皇が勅額を下賜しているが、当時の寺勢は寺領50石、院家12坊があった。1,427年〔応永34年〕兵火にあつて焼失し、1,670年〔寛文10年〕に本堂が再建され、昭和39年に現在地に移された。

丹波道主命〔たにはのみちのぬしのみこと〕

崇神天皇は日本中部地帯を制圧するために四道將軍を任命、派遣している。すなわち北

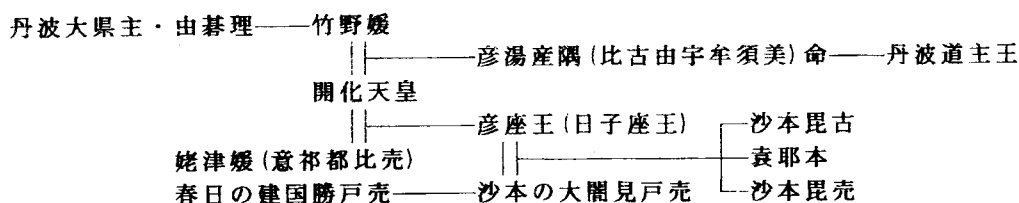
陸は大彦命、東海には武渟川別〔タケヌカワワケ〕吉備には吉備津命を、そして丹波には丹波道主命を遣わし、それぞれ大和勢力に背く者を討たせている。なぜ丹波道主命は出雲ではなく丹波に派遣されたのだろうか。ここで当時の出雲地方との力関係をみなければならぬ。

崇神天皇の父開化天皇は、丹波の大県主由基理〔オオアガタヌシユゴリ〕の娘竹野媛をめとり、また子供の垂仁天皇は丹波比古多須美知能宇斯王〔タンバノヒコタタスミチノウシオウ〕の娘氷羽州比売命〔ヒハスヒメノミコト〕を妃としている。

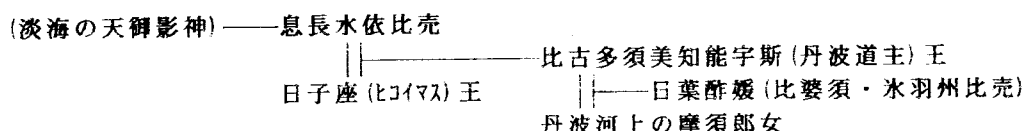
神話では、出雲はすでに天照大神に服従したこととなっているが、しかし崇神朝のころには出雲振根の乱もあり、出雲勢力は大和政権に対して必ずしも服していないなどのことをみると、丹波道主命を丹波に派遣するなど、当時の大和朝廷勢力の強力な北方鎮圧政策があったのか。あるいはまた丹波、丹後は吉備と同じく、大和とならんで大型の前方後円墳が発達したところだから、大和王朝との間に特別の関係があったのかも判らない。

なにはともあれ丹波道主命は天皇家と密接な関係があったことは間違いない。その系図を示しておこう。

日本書紀では



古事記では



となっている。

丹後国分寺跡

宮津市国分の天橋立を南に望む景勝地に京都府立丹後郷土資料館と隣接しており、昭和5年国の史跡に指定されている。

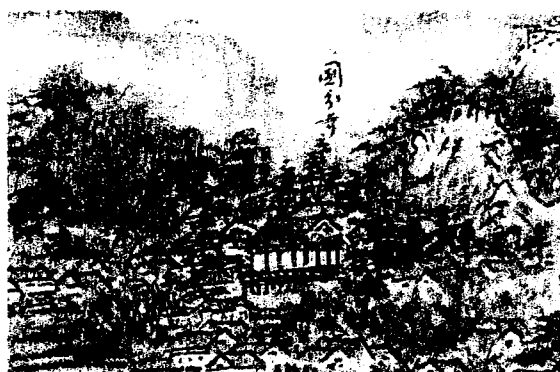
国分寺は741年〔天平13年〕に聖武天皇の詔によって国ごとにおかれたが、丹後国分寺の創建時期はわかっていない。ただ「続日本紀」天平勝宝8年〔756年〕の関連記事や、瓦その他の出土物などから8世紀末には建立されていたと推定される。鎌倉時代には一時衰微したが、1334年〔建武元年〕に住職円源坊が盗まれていた本尊を買い戻して再建している。このときの本堂は5間四方といわれ現在残っている礎石と一致し、また京都国立博物館蔵の雪舟が描いた「天橋立図」にもその伽藍が描か



丹後国分寺跡

れている。その後戦乱のため再び衰微し、永正年間〔1, 504～21年〕の一色氏と若狭武田氏との戦いで焼かれており、礎石には火災のあとがのこっている。

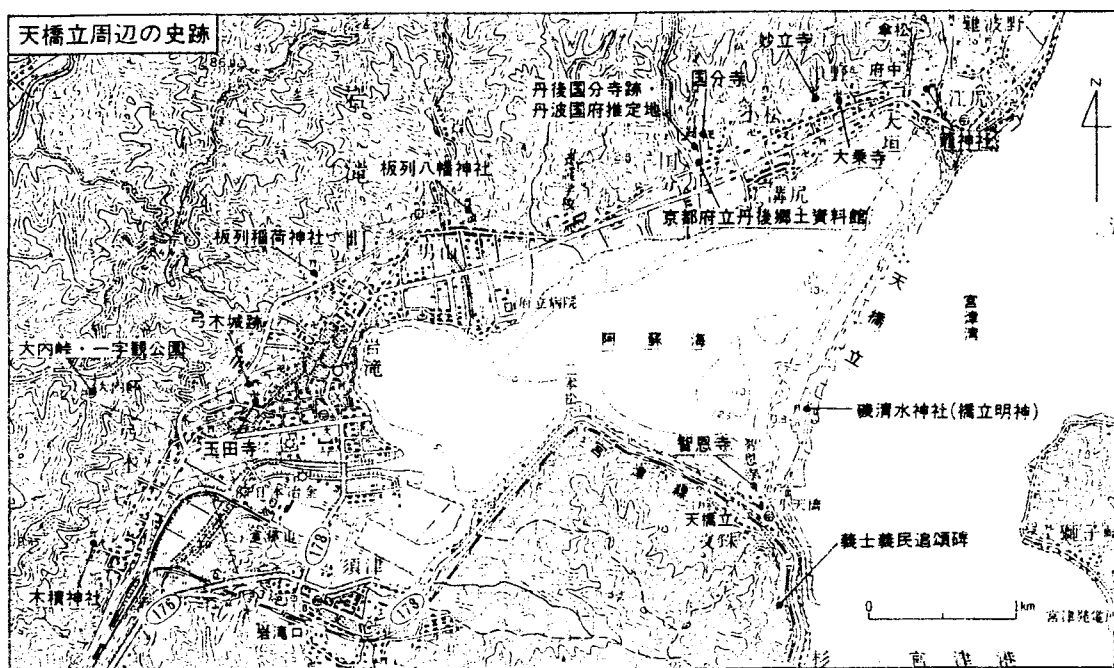
現在の国分寺は江戸時代の再建で、1, 334年〔建武元年〕に西大寺派の宣基上人らが丹後国分寺の再興の経緯を詳しく記録した「丹後国分寺再興縁起」〔国重文〕や木像毘沙門天面〔鎌倉初期作〕を所蔵する。



▲雪舟筆天橋立図の中の丹後国分寺

京都府立丹後郷土資料館

昭和45年に京都府が正倉院の校倉造りをもとに設計建築した建物で、鉄筋コンクリートの一部二階建である。丹後国分寺跡を含む敷地面積は約28,000平方メートルで京都府北部の歴史、美術、考古、民俗などの資料および出土品約600点の収集保存と研究、展示を行なっている。



籠神社〔このじんじゃ〕

宮津市大垣の天橋立の北端にあり、海部祖神天火明神〔アメノホアカリノカミ〕、天照大神、豊受大神、天水分神および氏神住吉神などを祀る丹後一宮である。「成相寺旧記」の大谷寺衆徒勅願寺訴状には「豊受大神宮之本宮籠大明神」とあるように、ここが伊勢神宮の外宮の元宮の地とされる。

本殿は、往古は30年ごと、養老年間以後は20年に一度造営されたというが、現在の府指定文化財の本殿は1,845年〔弘化2年〕の再建で昭和6年解体修理されたもので

あり、桁行三間、梁行二間の伊勢神宮内、外宮につぐ規模の神明造である。

社宝には籠神社の歴代神官を勤める海部氏の819～847年代の系図〔国宝、日本最古の系図〕、「正一位籠大明神」の木造扁額〔国重文、室町〕、丹後国府中籠神社経塚出土品〔国重文〕などがある。

摂社真名井神社本殿は1, 832年〔天保3年〕の造営でこれも府指定文化財である。神門前の狛犬は鎌倉末期の作で、前脚の破損は岩見重太郎に切付けられた傷といわれている。



籠神社(宮津市) 本殿



籠神社の石造狛犬

智恩寺〔ちおんじ〕

宮津市文殊にある臨済宗妙心寺派の寺である。山号は天橋山、五台山という。また切戸の文殊堂、九世戸の文殊堂あるいは智恵の文殊とも呼ぶ。本尊の木造文殊菩薩は獅子に乗って海を渡る姿をしており、日本三文殊の一つである。寺伝によると808年〔大同3年〕に平城天皇が当地にきて霊夢に感じ勅願で創建、のち醍醐天皇より天橋山智恩寺の号を賜った。中世には足利氏細川氏、京極氏などの手厚い保護を受け、足利義満は20年間に6回も参詣している。寛政年間には末寺21ヶ寺、塔頭三字を数えた。



智恩寺本堂

本尊の木造文殊菩薩、脇士の善財童子、優闍王像〔うてんおう〕、金鼓、門を入れて左手の多宝塔などは国の重文である。この金鼓には高麗年号の「至治二年」〔1, 322年〕の銘があり、多宝塔は一色氏の武将府中城主延永春信が寄進したと伝えられていたが、大正の修理の際に明応9年〔1, 500年〕の墨書が発見されてそれが確認された。そのほか書院前には織部型のマリア灯籠、和泉式部塚といわれる宝篋印塔、及び慶長16年〔1, 611年〕に京極高知が砲術家稲富一夢斎のために建てたという宝篋印塔なども

境内にある。

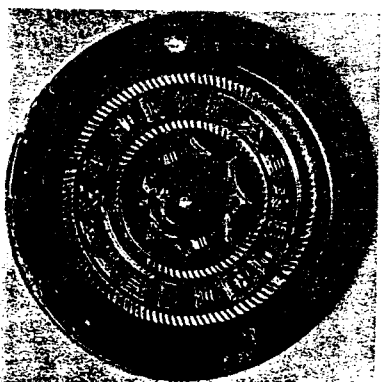
海部氏〔あまべうじ〕

籠神社宮司の海部光彦氏によると「海部氏の始祖の火明命〔ホアカリノミコト〕は、天祖から二面の息津鏡〔オキツカガミ〕と辺津鏡〔ヘツカガミ〕を賜り、それを持って若狭湾の冠島に降臨した」といい、今日までこの鏡が籠神社に伝わっているという。息津鏡は径17, 5掬の後漢前半期、辺津鏡は径9, 5掬の前漢晩期の銅鏡である。とすれば海部氏は天祖から神聖な鏡を賜るような家柄だといえる。

さて海部氏とはどういう人だったのだろうか？アマベという名前が象徴するように一口で言うならば「海人族」とかいうことになる。部として編成された海部の分布を倭名類聚抄から拾ってみると、近隣では

筑前、怡土郡海部郷	筑前、那加郡海部郷
筑前、宗像郡海部郷	豊後、海部郡
土佐、高岡郡海部郷	讃岐、山田郡海部郷
阿波、那賀郡海部郷	安芸、佐伯郡海部郷
安芸、安芸郡阿満郷	備前、阿磨駅
淡路、三原郡阿万郷	紀伊、海部郡海部郷

であるが、遠くでは太平洋側では千葉県を東限とし、日本海沿岸地域では越前の坂井郡海部郷あたりまでに及んでいる。ところで籠神社の海部氏は上記のとおり息津鏡と辺津鏡の二面の鏡を伝承しており、それからみると宗像大社の「沖津宮」、「中津宮」、「辺津宮」との結びつきも考えられて発祥の地は博多湾一体の同じ海人族である宗像氏がうかんでくる。

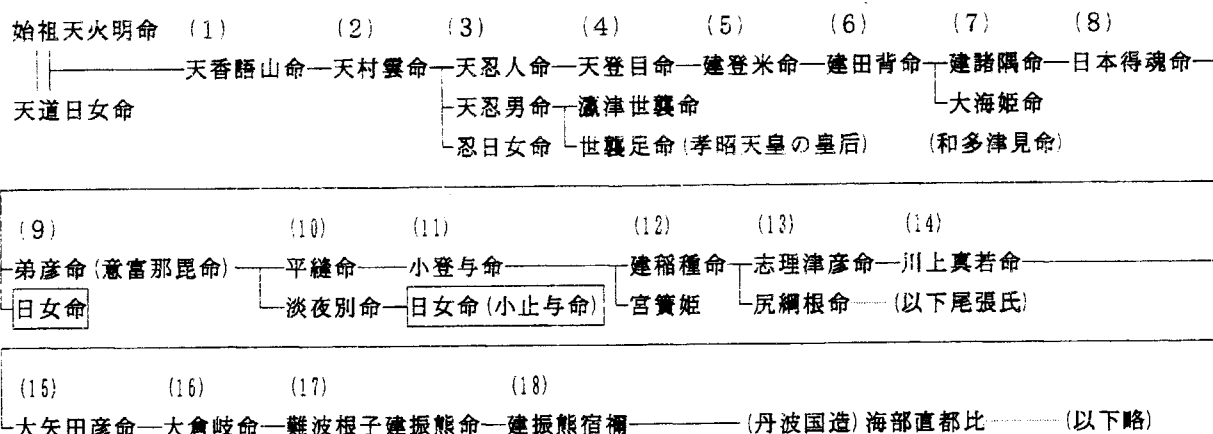


籠神社に伝わる息津鏡(上)と辺津鏡(下)
息津鏡は直径17.5センチ、「内行花文長宜子孫鏡」。
辺津鏡は直径9.5センチ、「内行花文昭明鏡」。

海部氏系図

籠神社宮司家に伝わる籠神社祝部〔ハフリベ〕の系図で国宝に指定されている。始祖の火明命〔ホアカリノミコト〕から海部直田雄に至るもので9世紀の作である。

海部氏系図



これをみると海部氏は5世紀には丹波国造との記載があり、また9代の「弟彦命」および11代の「小登与命」にはおのおの妹に「日女命」という人がおられ、この「日女命」こそが「卑弥呼」だという説もある。

作山古墳群〔つくりやまこふんぐん〕

与謝郡加悦町明石〔カヤチョウアケシ〕に所在する総数5基の古墳である。前方後円墳1基、円墳2基、方墳2基とからなる。そのうち4基が国の史跡に指定されている。

1号墳は造り出し付きの36畝の円墳で、二段築成、葺石、埴輪をもち、鏡、石釧、玉類、鉄剣、鉄斧等がでている。

2号墳は28畝の円墳で、二段築成の埴輪もち、

3号墳は一辺が17畝の方墳、

4号墳は30畝の前方後円墳で葺石あり、

5号墳は一辺が13畝の方墳で、鏡、石釧、玉類、鉄製品が出土している

ものである。古墳時代前期後半から中期初め頃〔4世紀後半から5世紀初め頃〕と考えられる。

蛭子山古墳群〔えびすやまこふんぐん〕

作山古墳群に隣接しており、前方後円墳1基と7基の方墳からなる。このうち1、2、3号墳は国の史跡に指定されている。

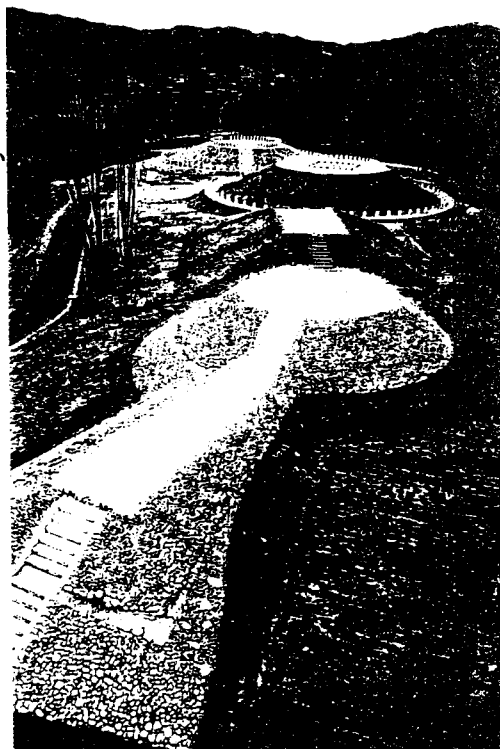
1号墳は全長145畝、後円部100畝、高さ16畝、前方部は巾62畝、高さ11畝の丹後地方最初の大型前方後円墳で、丹後地域の首長系譜を形成する古墳と考えられている。三段築成で葺石、埴輪列があり、後円部の竪穴式石室からは漢代の内行花文鏡と鉄刀、その周囲からは鉄剣、鉄鏃などの武器多数が出土した。古墳時代前期後半〔4世紀後半頃〕のものである。

2号墳から7号墳まではやや小型の方墳で、1墳のちかくに散在している。

加悦町古墳公園

作山古墳群、蛭子山古墳群は、ともに文化庁の「ふるさと歴史の広場事業」の適用をうけて整備され、レプリカなどにより葺石埴輪列を有した古墳築造当時の姿に復元され、平成4年に加悦町古墳公園として公開された。

かや 加悦町古墳公園



空から見た加悦町古墳公園

手前が作山古墳、木が茂っているのが蛭子山古墳

加悦谷

天橋立で宮津湾と隔てられた阿蘇海にそそぐ野田川の河谷の総称が加悦谷である。上、中流は加悦町と野田川町、下流部は岩滝町と宮津市が占めている。

丹後の国は713年に丹波の国から分離されたが、かつての丹波王国を象徴する大型の前方後円墳の分布状況をみると、日本海沿岸の網野町に198畝の銚子山古墳、190畝の神明山古墳があり、それについて加悦町の蛭子山古墳がいちするなど、この加悦谷もかつては丹波王国の政治、文化的統合の中核であったことは間違いないであろう。

この「加悦」の名の由来は詳らかではない。最初歴史的に名前が出てくるのは「丹後国諸荘園郷保惣田数帳目録」で、正応元年〔1, 288年〕に加悦荘〔荘園領主は京都実相院〕の名が残っている。その後では「丹後国御檀家帳」によれば15世紀の丹後守護職一色氏配下の武将石川氏の居城がはるか下流の野田川町にありながら「かやの御殿」と出てくる程度である。





竹田城と古代丹後王国を訪ねる旅資料

編集 備陽史探訪の会 旅行委員会

中村勤史 馬屋原亨 佐藤秀子
平田恵彦 寺崎久徳 塩出基久

文責

和田山町・養父町（主に竹田城・大藪古墳群等）…平田恵彦
出石町（主に出石城下町・宗鏡寺・山名氏等）……塩出基久
久美浜町・宮津市・加悦町（北郷寺・観音寺・野崎寺）…寺崎久徳

平成10年10月17日（土）、18日（日）